東京帝國大學圖書

打認物便郵種三第　日六廿月二十年一卅治明
行發日一回一月每）行發日一月六年八卅治明

求道第貳卷第五號目次

求道

◎人生の歸趣は佛天の御はからひ也

◎確信の行動
煩悶と確信
煩悶の兩面
源平時代の煩悶
鎌倉時代の確信
確信時代の曙光
信仰の確立
確信の行動

◎人格の陶冶

講話

◎絶對の地盤　近角常觀

◎佛陀の引接　近角常觀

實驗

◎『羽村』其後の消息　清水甲子三郎

◎母の愛と佛陀　本谷暢音

靈蹟

◎五臺山探勝記　菊池秀言

歎咏

◎草庵の若葉　左千夫

◎植物園雜詠　甲之、常音

時報

◎求道學舍紀念日◎清澤師三年忌◎夏期修養の期來る◎求道學舍第二第三求道會講話題

講話

毎日曜午前八時
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會
（九段坂佛教倶樂部）

最終土曜午後七時
第三求道會
（濱町日本橋倶樂部）

求道

第貳卷
第五號

人生の歸趣は佛天の御はからひ也

佛智不思議なることは如何にしても到底人間の力を以て思議すべきに非る也、吾人常に佛智不思議を信じ、日夜之を口にし、朝夕之を讃ず、而して猶此不可思議の境界に向て思議を挾むことありき、而して吾人自ら思議を挾みたることを自覺せずして私かに自ら沈思憂悶す、以爲らく、人生如何にせば可ならむと、是既に思議するものに非ずや。世人以爲らく、如何にして生活せむ、如何にして療養せむ、如何にして學問せむ、如何にして修養せむ、如何にして宗教界を刷新せむ、如何にして信仰を確立せむ、如何にして傳道せむ、如何にして世の佛智を知らざるものをして知らしめむと、皆是人間の思慮を以て不思議の佛智を思議し、佛智を信ぜざるが爲めに徒らに計畫云爲するもの、たとひ其情切にして其志多とすべきが如しと雖其根底たる畢竟佛智を疑惑するより出て來らざるはなし、佛天は決して吾人に對して其天眼を怠り玉ふが如き無慈悲なることなければ也。

人は須らく佛天の覆ふ所極るなきを信ずべし。人は須らく佛天の計り玉ふ所、吾人思慮の外に出つることを信ずべし。人は須らく佛天の到る所、至微至細通ぜざることなきを信ずべし。人は須らく佛天の力を被るにあらざれば一擧手一投足だもなし能はざるを信ずべし。既に稱して不可思議といふ、一言にして盡せりと云ふべし。此境に向ては吾人一指を下す能はず、一言を狹むあたはず、釋尊既に嘆して曰く、我說くこと晝夜一切すと雖尙未だ盡すこと能はずと、吾人の小智豈佛智海に向て測量を企つべけんや。經に曰く如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の測る所に非す、唯佛のみ獨り明らかに了りたまへりと、眞に是唯佛と佛との知見なるもの、徒らに思議の計算測量を逞うせむとするは、既に是れ佛智を輕視し、佛天に對して不

遜なるものと言ふべき也。此般の消息は親鸞聖人次の書簡中にあらはれたり曰く、

さては念佛のあひたのことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふろふ、かへす〳〵、こゝろくるしくさふらふ。詮するところ、そのところの緣ぞ、つきさせたまひさふらふらん、念佛をさへらるなんど毎まふさんことに、ともかくもなげきれほしめすべからずさふらふ。念佛とゞめんひとこそ、いかにもなりさふらはめ、まふしたまふひとはなにかくるしくさふらふへき。餘のひと〳〵を緣として、念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。そのところに、念佛のひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふへし。慈信坊が、やう〳〵にまふしさふらふなるによりて、ひと〳〵も御こゝろとものやう〳〵にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへす〳〵不便のことにさふらふ。ともかくも、佛天の御はからひに、まかせまいらせさせたまふへし。そのところの緣つきておはしましさふらはゞ、いつれのところにても、うつらせたまひさふらふておはしますやうに、御はからひさらふへし。慈信坊がまふしさふらふことをたのみおほしめして、これよりは餘の人を强緣として、念佛ひろめよとまふすこと、ゆめ〳〵まふしたることとさふらはす、きはまれるひがことにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへは、おどろきおほしめすべからす。やう〳〵に慈信坊がまふすことを、これよりまふしさふらふと御こゝろえさふらふ、ゆめ〳〵あるへからずさふらふ。法門のやうも、あらぬさまにまうしなして、さふらふなり。御耳にきゝいれらるべからずさふらふ。きはまれるひがごとどものきこへさふらふ、あさましくさふらふ。入信坊なんども、不便におほえさふらふ。鎌倉にながゐしてさふらふらん、不便にさふらふ。當時それもわづらふべくてそ、さてもさふらふらん、ちからをよばすさふらふ。奥郡のひと〳〵の、慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましさふらふなること、かへす〳〵あはれに、かなしうおほえさふらふ。これもひと〳〵をすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと、かへす〳〵あさましくおほえさふらふ。それも日ごろひと〳〵の信のさだまらずさふらひけることの、あらはれてきこへさふらふ、かへす〳〵不便にさふらひけり。慈信坊がまふすことによりて、ひと〳〵の日ごろの信の、たちろぎあふておはしまし

さふらふも、詮ずるところは、ひと〳〵の信心のまことならぬことの、あらはれてさふらふ、よきことにてさふらふ。それをひと〳〵は、これよりまふしたるやうに、おほしめしてあふてさふらふこそ、あさましくさふらへ、日ごろやう〳〵の御ふみどもを、かきもちておはしましあふてさふらふかひもなくおほえさふらふ。唯信鈔やう〳〵の御文どもはいまは詮なくなりてさふらふとおほえさふらふ。よく〳〵かきもたせたまひてさふらふ法門は、みな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたがひて、めてたき御文どもはすてさせたまひあふてさふらふと、きこへさふらふこそ、詮なくあはれにおほえさふらへ。よく〳〵唯信鈔、後世物語なんどを御覽あるへくさふらふ。年ごろ信ありとおほせられあふてさふらひけるひと〳〵は、みなそらことにてさふらひけりときこへさふらふ。あさましくさふらふ〳〵。なにことも〳〵、また〳〵まふしさふらふへし。

正月九日

親鸞

眞淨御坊

實に是れ聖人が佛天の御はからひを信じたまへる至極なり。蓋し此消息文にあらはれたる聖人の信念は實に廣大にして測るべからざるものあり。當時慈信坊聖人の敎を矯めて異解を主張し、人心を蠱惑せり、是れ傳道上に於ける一大蹉跌を生じたるもの、他の消息に傳ふる如くむば之が爲めに九十餘人の信徒は大府の中太郎を去りて慈信坊に屬し、又此時念佛につきて讒訴起りて、高弟鎌倉に往きて辨疏しつゝあり、聖人東國の傳道正に盛ならむとする時起り來れる一大障害也、而して聖人此間に處して少しも思議を用ゐることなく、唯佛天の御はからひを確信して、從容として大慈の御心に任せ玉ふ欽廓たる御心中、洵に鑽仰に堪へざる也。

夫れ宗敎家の一生は信念の實現にして、其一擧一動悉く其信仰の光明を體現せざるなし。然れども其始に當りてや信念を以て主張し、猛進し、奮鬪して飽までも其所信に殉せずむば止まざらむとす、其勢向ふ所敵なく、四海を風靡し、天下を卷席するの慨なくむばあらず。ルーテルが、ウヰツテンベルヒの城寺に九十五條を揭示して、堂々として贖罪劵を非難し、進みてウ

オームス議場に於て皇帝法王の權威の中諤々として所信を斷言せるが如き、日蓮上人が四個格言を正面に翳して鎌倉の街頭に說き、龍口の難を經て遂に佐渡に流謫せらるゝに至るまでは實に一歩も退くものに非るなり。然るにルーテルがワルトブルヒ城中に幽居して聖書飜譯の大業に着手し、ガールスタット一輩の過激黨を鎭撫せむと欲して、ウヰテンベルヒに歸らむとするや彼が態度は一變せり。固より其中心たる信念は毫も變化するものにあらず、されど其發動するや全く其趣を異にす、彼は何人が害を加ふと雖毫も之を避けざるを決心せり、神は飽まで彼を保護して危に近つかしめざるを確信せり、彼の運命を危ぶむものは寧ろ神を信ずる篤からざるものなりと斷言せり、かくして彼はカールスタットを鎭撫し、其後又百姓一揆をも鎭撫せり。佐渡己後の日蓮全く其面目を異にす、是彼が信念が變化したるにはあらず實ろ其確信の固き、手を下さずして大勢の赴くところを知れば也。而して我親鸞聖人に至りては始よりルーテル日蓮の如き戰を挑み、禍を買ふの態度に出づるなし、されと其信する所を主張し、其信する所を實行するに至りては一歩も退くものにあらす、特に名聞を捨て、形式に拘泥せざるに至りては敝履を棄つるが如し。聖人之か爲に讒訴に遭ひ流謫に處せらるゝも猶與り知らざるものゝ如し、流謫已後東國傳道時代の聖人に至りては既に業に渾然として大醇なる者、晩年に至りては圓熟其極に達し、鎌倉の訴、慈信坊か蠱惑の如き聖人矜哀の涙を以て之を同化し、佛天の御はからひに任せて手を下さずして寸毫も人間の思議を加へ玉はざる所、如何に其信念の偉大なりしかを想見すべき也。請ふ吾人をして此書簡中にあらはれたる聖人の老熟の信念なるものが其發動の形式が如何に柔和たるにも拘はらず其實質の如何に至大至剛なるかを味ひ奉らしめよ。

さては念佛のことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふらへ、かへす〳〵くるしくさふらふ、詮するところ、そのところの緣ぞつきさせたまひさふらふらむ。嗚呼其ところの緣ぞつきさせたまひさふらむ、是聖人が一代の敎化を始終したまへる根底なり。蓋し聖人傳道の跡を尋ね奉るに毫も自己の力を以て强て開鑿せむと企てたまふことなし。抑々佛陀無上の矜哀により法然聖人に常隨して法を受く、忽にして南北僧侶の讒訴ありて師弟東西袖を分ちて配所に赴き給ふ、以爲らく是邊鄙の群類を敎化せしめむが爲なりと。聖人越後信濃を經て、常陸に敎化を垂れ給ふや草鞋竹杖颯然として居を定むるなし、一寺を經

營して基礎漸く成らむとするや忽ち弟子に讓りて他の未だ法雨に潤はざるの地に趣き玉ふ。聖人の眼中毫も我敎域を擴張し、我宗旨を盛にせんと企て玉ふことなし、眞宗の繁昌、念佛の弘通一に是れ佛陀の御力にあらずむばあたはざる也。故に曰く、もかくも佛天の御はからひにまかせまいらせたまふべし、そのところの緣つきておはしましさふらはゞいづれのところにてもうつらせたまひてさふらふておはしますやうに御はからひさふらふべしと、聖人が一點自力の心を挾むことなく、唯絕大なる佛天の御はからひに任せて進退云爲したまへるの狀所謂弘誓の船に乘りぬれば大悲の風に任せたまへる也。

聖人の眼中唯佛陀の大悲あるのみ、我信ずるところは佛陀の大悲のみ、我說く所は佛陀の大悲のみ、我をして信ぜしむるも佛陀なり、人をして聞かしむる亦佛陀なり、佛陀已外に何物をも認めず、人の來りて師弟の契を結ぶ佛陀の御心なり、人の去りて他に趣く亦佛陀の心ならざらんや。信樂坊の聖人の敎に從はず去らむとするや從容として宣はく、親鸞は弟子一人ももたずさふらふ、其故はわがはからひにて人に念佛をまふさせさふらはゞこそ弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよふしにあづかりて念佛まふしさふらふひとを我弟子とまうすことはめたる荒凉のことなり、つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あればはなるゝことのあるものを、ひとにつれて念佛すれば往生すべからずなんとまふすことは不可說なり、如來よりたまはりたる信心を我物かほにとりかへさんとまふすにやと、師弟間の交、唯一佛陀の力あるのみ。我力ありて人を敎ふるにあらず、唯如來の敎法を信ずるが儘に說きかしむるのみ、是亦佛陀の力にあらずや。我何の力ありてか人に敎ゆると言はむ、若し人ありて我に背き去る亦悲むべからず、若し人ありて念佛を止め、敎化を妨ぐるものありと雖亦何ぞ嘆くを用ゐむ。故に曰く、念佛をさへらるなんとまうさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ、念佛とゞめんひとこそいかにもなりさふらはめ、まふしたまふひとはなにかくるしくさふらふべき、餘のひと〳〵を緣として、念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ、そのところに念佛のひろまりさふらはんことも佛天の御はからひにてさふらふべしと、嗚呼何人も煩惱の多きを懺悔せざるものあらむ、何人も名利の嫌ふべきを自覺せざるものあらむ。然れとも善に執着する心、離れかたく、法に愛染するの情去り難し、而して聖人の如く法に對して一點の私を挾まず、弘法につきて何

等の計畫を施し給はざる豈大ならずや。既に如來の敎法なり念佛聖敎は流通物なり、何ぞ之を私するあらむ、愚身が信心に於てはかくの如し、此上は念佛をとりて信じ奉らむとも、すてんとも、面々の御はからひなり、若し之を信せざらんは佛緣のなき人々なり、若し佛緣ましまさば一旦信せざるの人も必ずや信じ給ふの時來るべし、一に佛天の御はからひに任せ奉るべし。

聖人の頭上唯佛天の知ろしめすあるのみ。

かくの如く佛天の御はからひを信じ賜ふの聖人は、たとひ謗法の人あるも是既に佛の豫言懸記し玉ふ所なるを想起して却て佛說の眞實なるを讃嘆し玉ふ。曰く慈信坊かやう〳〵にまふしさふらふによりて、ひと〳〵も御こゝろとものやう〳〵にならせたまひさふらふよしうけたまはりさふらふ、かへすがへす不便のことにさふらふ、この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときおかせたまひてさふらへはおどろきおほしめすべからす、やう〳〵に慈信坊がまふすことをこれよりまふしさふらふと御こゝろえさふらふゆめ〳〵あるべからすさふらふ、法門のやうもあらぬさまにてまふしなしてさふらふなり、御耳にきゝいれらるへからずさふらふ、きはまれるひがことのきこへさふらふ、あさましくさふらふと、聖人の嘆き給ふは唯法門を亂り、眞實如來の御敎を誤り傳ふることどもなり。嗚呼聖人は唯如來の敎法と共に一體となり給ふなり、如來の敎法を信するものは同朋なり、如來の敎法に背くもの亦敢て之を追はず、されど如來の敎法を亂ること豈嘆かざるべけんや。

然りと雖念佛を妨げ、如來の敎法を亂ると雖畢竟亂れ妨げしむるものゝ罪のみ、之か爲めに如來の敎法に何等の累を及ぼさゞるのみならず、之を聞くもの何等の罪あるべからず。聖人慈信坊に與へて宣はく、詮するところひがことをまふさんひとはその身ひとりこそともかくもなりさふらはめ、すべての念佛者のさまたげとなるへしとはおぼえずさふらふ、また念佛をとゝめんひとは、そのひとばかりこそいかにもなりさふらはめ、よろづの念佛するひとのとがとなるべしとはおぼえすさふらふと、而して慈信坊の言によりて信心亂失したるの人は是慈信坊ありたるが爲めに然るに非ずして既に是れ眞實佛陀の慈光に接せざりしの人のみ、たとひ慈信坊なしと雖必ずや信心退轉すべき運命を有するの人、平素口に佛名を稱へ、如來を信ずと雖、一旦事あるに及びて其眞實ならざるを暴露し來る固より其所なり、之を以て罪を慈信坊に歸すべからざる也。故に曰く、奥郡の

ひと〳〵の慈信坊にすかされて信心みなうかれあふておはしましさふらふなることかへす〳〵あはれにかなしふおぼえさふらふ、これもひと〳〵をすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと、かへす〳〵あさましくおぼえさふらふ、それも日ころひと〳〵の信のさたまらすさふらひけることのあらはれてきこへさふらふ、かへす〳〵不便にさふらひけり、慈信坊かまふすことによりて、ひと〳〵の日ころの信のたちろきあふておはしましさふらふなるこのあらはれてさふらふ、よきことにてさふらふと、嗚呼信心のまことなきことの第一着歩なり、佛天の御はからひ遂に人間思議の境に非る也。

已上の言の如きは聖人が書簡の上にあらはれたる佛天の御はからひなる信念を基礎として鑽仰したる者、蓋し聖人か此信念は其敎理の上に明瞭に發揮せられたり。夫れ此の如き不可思議なる佛智を認めさるものを名けて疑心自力の行者と稱し、絶對他力の光明を仰がさるものと爲す。而して聖人は猶此の如きの人々も絶對の大悲に洩れざるものとなし、猶絶對大悲に接すへきの行程と爲す。而して聖人は之を佛陀願力の上に訴りて先天的に佛陀既に其意ありて方便引入の企を爲し玉ふなりと斷言し給ふ、所謂三願建立の法門なるもの即是也。吾人固より三願建立なるものが歷史的に當時聖人の所信と異れる西山鎭西の兩派に配當せらるゝものなることを知り、而して之を佛陀發願の上に先天的に計畫せらるゝを聞くときは奇異の思なくむはあらざる也、然れども此の如きは敎理を以て偉大なる信念の結晶たるを悟らずして、徒らに空に畫き文を解するの謂なりとするの罪に坐するのみ。蓋し歷史的西山鎭西とあらはれたるは、西山鎭西を待ちて初めて然るものにあらずして若し吾人の實驗に徵するときは如何なる人類の胸中にも自力疑惑の存するかぎりは永刼の昔より存するものにして、又未來永刼人間のあらむかぎりは存在すべきもの、何ぞ必しも親鸞聖人の當時、鎭西、西山あるが爲めに初めて生し來れるものならむや。既に此の如しとすれば現時の信仰問題亦同一の軌道を踐まずんはあらざる也。吾人をして言はしめは人生の上に絶對不思議の佛陀の力を認めざるものゝ如きは是即ち同一疑心自力の行者に外ならざる者、彼の西山鎭西と何ぞ撰ばむ。而して親鸞聖人が三願建立して佛陀は此の如き疑心自力の行者を放棄することなくして特に方便引入の願を起し大悲を顯し給ふ、若し此意を人生上に實感し來らむ

か、世の佛智不思議を信せずして爲めに起り來る出來事の如きも佛陀固より之あることを見そなはして必す方便引入して絶對の光明に導かむことを企て給ふ、此に於てや佛天の御はからひなる者如何に深くして其邊涯を知るべからず、三願の建立は是れ佛天の御はからひを願力の上に顯示し給ひしもの。故に聖人他の消息に曰く、此信を得ることは釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし、しかれば諸佛の御おしへをそしることなし、餘の善根を行する人をそしることなし、この念佛する人をにくみそしる人をもにくみそしるへからず、あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ聖人はおほせことありしか、あなかしこ〳〵、佛恩のなかきことは懈慢邊地に往生し、疑惑胎宮に往生するたも彌陀の御ちかひのなかに第十九第二十の願の御あはれみにてこそ不可思議のたのしみにあふことにてさふらへと、嗚呼何事も佛陀の御手回はし也、佛天の御はからひ也。此に於てや親鸞聖人信仰の中心は唯名號不思議也、誓願不思議也、佛智不思議也、佛法不思議也、唯不思議と信しつるうへはとかくの御はからひあるへからす候、是所謂他力には義なきを義とすとの眞髓、はからいなきの至極也。

> 先師清澤先生絶筆に曰く。死生命あり富貴天に在りと云ふことがある我信する如來は此命と天との根本本體であると、今にして之を想ふ是れ聖人の所謂佛天の御はからひなる者絶對無限の至大至剛を感ず來らずむはあらず、嗚呼浩なる哉
>
> 六月六日三週忌席上感話　常觀

確信の行動

煩悶と確信

今世煩悶を說くもの多し、然れども文學的の意義に於てす、宗敎の意義に於ける煩悶之に異る。煩悶は確信の前驅也。法然聖人が嵯峨の淸凉寺に詣し、親鸞聖人か京都六角堂に參籠し、ルーテルがアウグスチン派脩道院に入り、クロンウエルか、ハンチシドンに在りて苦悶の極夜中屢々市醫を呼びたるが如き、何れも人生の根本に向て沈痛なる憂を抱き悶絶僻地せむとするもの、カーライルか所謂地獄の闇黑に陷るか天上の光榮を闢くか二者其一を擇ふべき運命に陷れる極所也。今の人煩悶を說くを知りて確信を說くを知らす。

煩悶の兩面

煩悶は一面に切實眞摯なる理想を望見して、現實の境界此に伴はざるより起る奮鬪なり、換言せは絶對を望見しつゝ未だ相對の羈絆を脫せざる苦境なり。故に宗敎的煩悶は一面頗る眞面目にして襟を正さしむると共に他の半面は全く人生の缺陷を遺憾なく經驗することなり、即ち人間の罪惡を自覺することなり。故に宗敎の意義に於ける煩悶は決して誇となすべきものにあらず、寧ろ懺悔すべきもの、唯要とするところは苟も人間として何人も有し乍ら自覺せざる罪惡を自ら發見したるに在り、然れども煩悶懊惱の狀態に在るときは寧ろ不安心の極たるもの遂に他の半面たる絶對の理想を實現し來りて煩悶忽爾として去る昨夢の如し、此に於てや確信罕乎として絶對の地盤より生し來る。

源平時代の煩悶

今や實に煩悶の時代を去りて確信の時代に入るべきの時にあらずや、昔者平安朝の末葉源平內亂の時代は日本全國實に煩悶の時たりき、小松內府嘆して忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずといふもの、其志忠にして其情切なりと雖も遂に煩悶の狀態にあらずや、死を神に祈るに至りては其極なるもの、遂に次の鎌倉の大確信の時代を迫り出したるにあらずや。

鎌倉時代の確信

鎌倉時代は實に確信の時代也、古來大義名分論の爲めに其實質の美を蔽ひ去らる。天下大亂の後眞實民を治めむと欲す、此に於てや徒らに虛名を追はずして實權を以て臨まむとす、敢て覇府を開き、執權の名の下に實力を運行す、承久の亂の如き非常手段を以て其確信を行ふ、時宗の外交、時頼の內治、皆然らざるはなし。時宗毅然として元の使を斬り弘安の役蒙古の艨艟を殲滅し、安危を一戰に決す、皆是確信の時代精神を實現せる者、眞個に是れ確信の行動と謂つべし。而して當時の宗敎を顧みよ、法然聖人は念佛の一門を開き、親鸞聖人は絕對不二の信仰を說き榮西禪師道元禪師の佛心宗日蓮上人の妙法皆是れ確然不動の地盤を開き來るにあらずや。

確信時代の曙光

明治時代は世界の舞臺に立ちて第二の鎌倉の時代を再演すべきの時にあらずや、國民は今や正に其天職を自覺して、確信の行動を事實の上に實現し來る、日本海の海戰、實に確信ある行動の典型にあらずや。固より是れ必しも宗敎的自覺より來るに非ず、寧ろ無意識に自覺の來らむとするもの、正に來るべき問題は國民の心性を開發して絕對の地盤に立たしむるに在り、今や國民の精神界は天上と地獄の中間に在るもの、煩悶極りて確信時代の曙光は正に地平線上に來りつゝあるにあらずや。

信仰の確立

此時に當りて思想界は實に渾沌たり、混亂たり、青年歸する所を失ひ、人皆形式を追ふて進退す、今や信仰に非んは立脚地を見出すあたはず、實質を攫取するに非んば人生何の所にか眞摯たる意義を發見せむ。此時にあたりて人生の歸趣を定むるもの獨り絕對の靈光あるのみ。

確信の行動

信仰は必しも宗敎家の專賣に非ず、又徒らに口に於てのみ說くものならむや、信仰は行動にあらはれ來りて初めて其力を實現し來る、確信なきの世に確信ある行動をなすは即ち生ける傳道なり、人生の凡ては確信ありて眞面目の意義を生じ來る。今後の明治時代、政治、社會、國際皆確信の立脚地に立たずむば世界の舞臺に於ける鎌倉時代を開くべからず。

人格の淘冶

人格なるものは果して人爲を以て作らるべきものなるか、若し作らるべしとせば、如何にして作らるべきか、蓋し是れ大なる疑問なり。現時敎育盛にして智識復雜に流れ、修養の叫、喧くして徒らに先哲の格言に飽き、文藝の流行は人をして優柔纖巧の風潮に堪へざらしむ、而して遂に人格の淘冶といへる問題は忘却せられ了んぬ。

抑々人格とは如何なるものか、蓋し一言にして盡すは難事なるべし。されど其主要なるの點は意志强健にして世評の如何に頓着せず、利害の念に支配せられず、所信確固にして其職に忠實なるに在り。從來吾國人顯敏にして利害を見るの明に富む、從て自ら其結果の如何を打算して事を左右にするの弊あり、又名譽を重んずるの極或は世評を顧みるの念に支配され、甚しきは正義を口にして知らず識らずの間僞善に陷るの嫌なきに非ず、何れも皆所信の確實ならざるより起る。若し所信を以て立つときは其行ふ所公明にして自ら顧みて疚しきところなく、力を用ゐずして意志强健ならざるなし。今時世人意志の强健を尊ぶの餘、徒らに剛愎執拗其非を遂ぐるの意味に誤解するものあり、是最も非なる者、吾人は寧ろ自家心中の賊を滅すが爲に强健なる意志を要することを覺悟せざるべかず、殊に人格として眼目とする點は一に其爲すべきことに忠實なることなり。世人或は位置の高下によりて人格を上下せんとするの風あるは最も卑むべきの傾向なり、一村長として忠實なるは大臣として忠實なると同價値にして、活版小僧として行正しきは主筆として行正しきと同資格たることを認めざるべからず。

かくの如きの人格は如何にして作るを得べきか、英國紳士の敎育によるべきか所謂武士道の敎育によるべきか、蓋し何れも此の如きの人格を作り出すの一方法たるや明なり。されど必しも、オックスフォルド、ケンブリッヂ大學の風を模したりとて英國紳士を作るべからず、封建時代の敎訓を反覆すと雖武士道を現實するを期すべからず、蓋し何れも人格を淘冶したる形式のみ、其形式を模したりとて必しも其精神を得べからず、蓋し人格は暖室の植木の如く爾かく養成し得らるべきものに非ず。蓋し人格は養成して得らるべきものに非ず、一に淘冶して其光明を發揮すべき也。

既に稱して淘冶といふ、吾人は飽まで困難に當り人生を經驗し、煩悶苦惱あらゆる風雨と戰て、遂に人間を理解し、社會を達觀し、最後に自覺の境に達し、絕對の地盤を見出すに在り。近時青年苦悶に陷るもの多くして道を求むるに切實なるが如きは確かに此大勢を呼び來るもの、必ずや無意義に終らざるを信ずるものなり。蓋し昔より大人物と稱すべき人必ず苦悶の結果たらざるはなし、ルーテルの如きクロムウエルの如き法然聖人親鸞聖人の如き何れも皆青年時代に於て一たび沈痛なる煩悶に陷り、暗黑世界に沈淪し、其底を極め來りて、最後の光明を發見し來りたるもの、此點に於て吾人は飽迄實驗の信仰を絕叫せざるべからず。信條的の宗敎、敎訓的の修養の如き到底姑息たるを免れず、寧ろ相對人間の地層を

破壞して、絶對靈界の地盤の上に立脚地を見出さゞるべからず、而して此の如きの經驗は苟も人間たるの限りは其境遇の如何によらず苦悶の種類に拘らず、人類として必ず到達し得べき靈境にして、若し此點に至らば、すべての人物を鍛錬溶冶し去りて、眞摯純潔なる人格たらしめざるはなし。古來信仰の門に階級を認めざるは此意義に於ける平等主義を實現せしことを看取せざるべからず。

釋尊が其敎團に於て印度の痼疾たる四姓の區別を認めざりしも、親鸞聖人が大願清淨の報土には品位階次を言はずと絶叫せられしが如きも何人と雖も全く同樣の內的實驗に達し得べきことを斷言したる者信仰の門には學問を認めず、財產を認めず、人種を認めず、男女を認めず、過去行爲の善惡に關せず、現在苦悶の如何に關せず、絶對佛陀の心光に接觸し來らば同一鹹味、共に靈的同胞の眞意義自覺せざるはなし。此の如く絶對の地盤より湧き來る信仰の靈泉は至誠、慈愛、希望、幾多の萬德を漲へ來りて吾人胸中の溷濁汚穢を洗ひ去り自然法爾として人をして淸淨澄潔ならしめざるはなし、此に於てや眞實の意味に於ける人格の淘冶を完ふせるものと言ふべし。

* * * * * *

講話

絶對の地盤

（第二求道會講話）

近角常觀

本日は絶對の地盤といふ題を出して置きました。これは既に言葉の上で其意味がよくわかる爲に出したのであります。絶對の地盤といふは一口にいへば信仰の地盤といふ事であります。絶對といふのは即ち相對の人生に對するので此相對の人生が破られて絶對に入るのであります。人生上の事は總てのものが相對であるから、其總てのものが破れて始めて絶對に入る。今日は此味を漸次に御話致さうと存じます。

近頃は求道の人々が益々眞面目の態度を以て進まるゝ樣であるが、其動機は何であるか。本日の如き麗かな日に、普通一般の人は彼是と浮れて居るにも係らず、皆樣は各一の問題を解かんが爲に御寄り下されたのである。皆樣が種々の問題について眞面目に御喜になれば必ず胸中に何か不安心の處がある。玆に安心の道を求めらるゝのである。そこで其問題は如何といふに、總て人生相對の上から出て居る。我々は皆此人生の相對の問題に苦しみ種々と考ふるのであります。その一二を申せば、或人は自分は一の理想を持て居て、其理想通に人生の上にやつて行かうとかゝる。處が人生は滿足に其理

想を實行せしめぬ、自らも亦實行する力のない事を感じて、不安の心を起す。或は極家族的の關係で、何うか親に孝行がしたいと思ふても出來ぬ、學問もせんならぬ、親は年を寄る、弟に學問させんと思ふもそう行かぬ、どうも心安からぬ。又生活といふ事も眞面目に考へる時は、十分の方法が立たぬ。各種の問題をいへばその數は知れぬ。或は又自分が罪を犯した事を後悔して苦しめる人もある。皆是人生上の事についての苦である。此苦を脫せんとして考へれは考ふる程譯が分らぬ。人生は皆相對に束縛して居る。實業家が金を儲けんとし又、財產を作る爲に日夜苦しむ、又學問は高尙の事であると思ふて、學問する事を唯一の光を得る道であると思つてやつて居ながら尙苦しんで居る。極端にいへは善い事を爲して居なから善い事をしたいといふて苦んで居る。人生には澤山の苦み澤山の樂かある。然れども皆是相對のもの、如何に善き方に進んてもやがて破らるべき運命を有して居る。親を慕ひ兄弟相愛する情は孝行の情であるけれども、それて全く苦かないといふ譯には行かぬ。人生上の事は如何に善い事てあつてもそれを地盤として安住する事は到底出來ぬ。唯最後に吾人の力は最早是迄なりといふ結局の處に至りて閃めき來る光か是絶對のものてある。是言ふへからす思議すべからざる絶對の力てある。此力に據りて我々は始めて進んて行ける、吾人は是を算外に於て、自分の力の及ばぬ事を自分の力て爲し遂けんと思ふから種々に苦しむのてある。如何にも佛陀は吾人の心に總ての同情を以て憐み給ふ慈悲の御方である。是迄は相對の見地に立て見て居た親や兄弟も絶對の光を得た後の見方は餘程變て成る。親といふものか慈悲の佛陀と一致して顯はれる樣になつてそこに親の難有い事が味はれる。人生の事に苦しむて居る間は、理屈の方より行けば理屈の方て苦しみ、それからそれへと考へて唯事か復雜なるのみて、さつぱり譯の分らぬ事となる。人智では到底分らぬ不思議の或物かある。人智極まつて始めて佛陀の絶對力を見出されて來れば、その立場の上より人生の總てのものか生きて來る。眞如といふも、こうとかあゝとかいふ理屈や道理は絶えて不可思議の佛智といふ時に始めて信仰を得れは、眞如とか一如とか實相とか無碍自在といふ意味も始めて知らるゝ。學問や哲學て種々の假定を立てゝ研究するといふものゝ、實際苦に陷る時は何も役に立たぬ。唯不可思議の境界かこれ佛陀の見玉ふ所のものてある。學問といひ哲學といふも、眞に絶對の味を味ふた上でなければ、生ける學問生ける哲學といふ事は出來ぬ。世の有樣よりいへは人は生活する爲に働くといふ、人か生活を求むるも何うしてもやれぬ、最後に其事か苦みになる然し生活の爲に人生は有るのてはない。むしろ吾人は各自に爲すべき事を爲す爲に生活はあるのてある。つまり生活か目的て人生かあるのてはないといふ事になる。今迄は生活の爲に人生かあると思ふて居たのが、絶對の地盤に立ちて見れは全くこれと反對て人生は各自の職務を盡す爲に生活かあるといふ事か知れる。是を以て見れは人生上のものは何を持ち來るも最後の動かぬ根底となるものは一とつもない。政治道德實業如何なる方面の事と雖も、人生上の根底か一度破れて佛陀の力に接して初めてそこに統一か成立つて、絶對の地盤

か出來る。是迄は人か憎いと思ふて居た心も、それか破れて絶對に入る、又監獄に入れるものか、人よりは人非人といはれたるものも絶對の眼より見れば左程差はない、苦しむものは皆相對人生に立場を置くからてある。然るに從來は人に對して無情に感して居た監獄の罪人も、其他種々の事について苦しんで居た人も、今迄の考へをくりかへして居る間は益苦むのてあるか、一度此世に於て人間以上に佛の廣大なる御力の有る事に氣かついて、親しく其慈悲を受けて見れば其味は實に無限てある。扨そうなつて見れば世間を怨む心もなくなつて、過去のおもひつめも現今の有樣も將來の事も、總て佛の御力にまかせ奉る。佛陀の絶對慈悲は如何なる惡人ても救ふといふのてある。此慈悲の光に接するや否や絶對界に入る、何の樣なものても始めて絶對に接すれば、我は今迄佛の慈悲を忘れて居つた、自分は惡るかつたといふ事に氣かつく。自分は善い事を爲す、己れは人よりえらいと思つて居り、人も又彼の人は感心なものだ立派なものだと許した處が、未だ佛の光を見出た人とはいはれぬ。廣大なる佛の慈悲を見ずして居る人は時來りて必ず大煩悶をする。人間は本來善い事をするのに憍慢な心をもつてする、總ての苦悶は皆此種類より來る、そら成程人情の上からいへば無理ならぬ事てある。監獄に居る人を見るに初めから惡るい事を爲ようと思ふて爲たのてはないがつい心の迷から罪を犯す樣になつたのてある。元々相對人生の立場に立つた人てあるから人生的の親切は必す破れ壞くる運命を持て居る。その人か種々の考を有てば有つ程苦しむ、この人の最後は如何であるかといへば、よき事をして居つたと思ふ其心は誤りてあつた事を知る。自分も人も人生の立場か悉くくだけた處て始めて絶對の佛陀の大慈悲は四方八方より輝いて來る。人生の極りは慈悲だ、自分の力てよい事をして居ると思ふたらそら誤てある。五十年間よい事を爲通したとするも絶對の眼より見れば何うてある、又人に善い事をするといふも必竟自分の餘力を以てするに過ぎない。他の同情をのみ求めんとするは誤てある。現實的に幸福を下し守つて下さるのは佛のみてある、此佛の光を見出し來れば茲に大地盤を得て佛の廣大なる恩德を蒙るのてある。

まことに如來の御恩といふ事をば沙汰なくして己れも人もよしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには善惡のふたつ總してもて存知せさるなり。そのゆへは如來の御こころによしとおほしめす程にしりとほしたらばこそよきを知りたるにてもあらめ。如來のあしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめと。煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたはごとこまとあることなきにただ念佛のみぞまことにておはしますとこそおほせさふらひしか。

如斯廣大なる恩寵を蒙りたるものなれば、何事を爲るにも感謝の念を以てするのてある、出來得る丈け御恩報謝の爲にさせてもろうのてある。何事も佛にむかひて感謝の爲にする。元より是れ絶對の地盤の上にするのてある。何ても自分が善い事をするといふ考へてやると遂に怨をかうようになる、詢に相對人生の問題は必ず破れる。田あれば田を憂ひ、宅あれば宅を憂ひ、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共に之を憂ふ。思

を重ね息を累み、憂念愁怖す、宗教は財産を無くしてしまへといふのてはない、唯それが人生唯一の目的てあると思ふは誤てある。宗教を味ふ爲に山に入るのも隱遁の生活に拘泥して居る。佛の御思召に從ひて實業をやる、商品をやるといふのも暴利を貪るといふのてはない、爲すべき事を爲して一向佛の冥見にはぢて佛道に從て行くならば、如何なる方面てあろうとそこに必ず光の出るものてある。實業の本義も茲に出て、其他政治の眞意生活の總ての眞義は出て來る。家庭の事についても絶對の立場に至らなければいけない。佛の慈悲の下に於てこそ親も子も兄弟も立つを得るのてある。相對人生のものは皆變動を免かれさる地盤てある、絶對に入れば平等てある。釋迦如來の四姓打破は種族を混合せられん爲てはない、同一の信仰の味は更に人種階級の如何にかゝわらないのてある。(大願清淨の報土には品位階次を問はず)佛の慈悲に入れば四海皆平等てあつて實に無碍自在の境てある。人は絶對の地盤に立つて仕事をすれば大安心てある。さうてなければ評判や位置や財産の爲に常に心を奪はれて共に陷る、人生には種々の階級があるか、各自に其階級に從ひて眞面目にやつて行きさへすれば、階級が高かろうか低かろうか更に異なる事はない。學生の勉强も一國の大政治を司る人も同し事てある。人間は茲に至りて始めて眞實の價値かある。これ即佛陀絶對の地盤てある、諸君の御考も私の考も茲に集りて御話するのも皆佛の御慈悲てある。然し私の申すは御緣に過きない。諸君は直接に佛に御逢ひなさるゝのてある。

親鸞は弟子一人ももたずさふろふ佛陀の御前にありては四海同胞皆信仰の朋友て、無階級てあつて眼中何の差別も見ない。親鸞聖人の仰には「彌陀の本願には老少善惡の人をえらばず、たゞ信心を要とすとしるべし、其故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」どれ程の苦惱があろうか何れ程の罪障があろうか總て遺憾なく救はるゝのてある、總ての人が同一鹹味の味となるのてある。過去の事は總て此大なる味を知らさん爲の偉大なる佛の御導てある。故に一朝過去の罪惡を思ひ出して腹をかき切らんとするに至るも蓋し佛の導てある。親を慕ひ兄弟を思ふ、よきもあしきも皆絶對の地盤につきあたればその以後は最早吾々のはからひは要らない。我々を導くべき光は絶對の地盤より溢れ來る。此地盤を見出す事は人生の何の方面よりもする事が出來る。此地盤を離れて相對に入る時は學問をえらいといふものも財産をえらいといふものも同じ事てある。絶對の地盤に入れば一杯の水も山海の珍味も、我を拋つものも我を撫づるものも皆佛の御力を感じさしてもらう緣となる。今日の多くの煩悶は何れも相對的の問題の上より來るのてあるか、絶對の地盤に立つて見る時は佛陀の光は是等の問題の上に悉く反射し來るのてある。この室の暗黑も其一孔より來る光を得て全室が明るくなる如く人生は絶對の光を得て總てのものが意義を生ずる。人によりて信仰に入る事が出來ぬといふけれども、決してそんな事はない、如何なる人間ても必ず信仰に入る事が出來るものてある。私が近頃種々の人に逢ふて話をして見ますのに。皆人生の歸趣の一なる事を見出しました。何うか皆樣も相共に此絶對の地盤の上に立ちて大なる佛陀の慈悲を味は

して貰ひ度いものであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

佛陀の引接

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日の題は「佛陀の引接」と致しました。この佛陀の引接と謂ふ事は從來色々の事に就いて度々御話致して居りますがどうも味へば味はう程彌々新らしい深い味が出て、中々謂ひ盡くす事が出來ぬ。現に昨日も死の運命に在る人と談し、今更らに一層適切に感じて來た。私は其人死が眼前に迫つて居るに如何にも氣の毒と思つて段々と話しを續け「お前は一体宗教は無いのか」と聞いて見た。處が其人は「イヤ私は已前より不動樣を信仰して居る、どうかしてと思つて日夜に不動樣を念じて居ります」、との答である。「夫れではお前が其不動樣を念ずる心持は矢張り自分を助けて欲しいのか」と尋ねると「確かに左樣である」と謂ふ事である。其處で私は話した「夫れではお前の信仰は結局自分の計ひに過ぎぬ。自分で先づ自分が助かり度いと自分勝手に寸法を決めて置いてそうして不動樣の御力で自分の望み通りにしやうとするのである。お前の不動樣を信ずるのは實に嬉しいが、我から斯く有り度いと自分で寸法を決めて、自分の計ひ通りの注文をするのではまだ足らぬ。夫れは未だ眞實佛陀の偉大なる御力を知らぬのである。佛陀の優渥なる御計ひは、中々我々人間の微弱なる力で測り知れる事で無い。今お前が斯の如き身になつたも、佛陀より見れば深い思召が有つての事である、夫れを我から先づ一の注文を定め、我が思ふ所へ佛力で持つて行かうとする、つまり佛力を利用してるのである。廣大なる佛陀の大慈悲を信じて見ると佛意の及ぶ所何處迄深遠であるか、我々にはとても解らぬ、從來自分で爲て來た事、心に思うた事、人間同士の間では或は辯解する事も出來るかも知れぬ、併し我々の心の奥底迄御照覽なる佛陀に對しては、我々は唯裏ら表てなく謝やまる外は無いのである。一度此の佛の御照して、心中一點自分が惡いと氣附かせて貰つて見ると、佛陀の慈悲と謂ふ事、忽ち頂けて來る。佛陀は決して從來の善惡に因つて我々を御見捨てなさる方で無い。亦如何程苦しくても我には少しも夫を恐れるには及ばぬのである。此の偉大なる佛力が頂けて見れば、我々は如何なる所に在つても心底より喜ばせて貰ふ事ができる。斯くなれば例へ自分の生命は助から無くても最早や我々の彼れ是れ謂ふ可きで無い。已に御前が此處へ來て誡めを受けて居る其事既に佛より見れば深い御考の上からである。凡て世上の事、自分の心に叶は無くても、皆な佛意より御覽なると一々意味が深くつて、無意味の者とては一も無い。夫れを忘れて居るからして我々には色々と不平が起るのである」此の樣な意味で話をした、此の死刑の人と謂ふものは、實に氣の毒な者で、却て正直で一刻心の人が多いのである。斯て話す間其人は無言で感に入つて居つた。私は更らに重ねて「お前の信仰して居る其不動樣と謂ふは慈悲心を以て我々を誡める方である、誡めて下さる方である。我々をば飽迄善くして

て遣り度いとの慈悲心で、若し我々に撓める必用のある欠點を見そなはす時、直ちに憤怒の相を現じて我々を誡めて下さるのである、佛には斯くの如く父の慈悲を以て愛くしみ下さる方がある。理に於ては到底許せぬ處を無理に曲げて助けて下さる母の佛があつて、即ち觀世音菩薩など夫れである。併しながら是れが決して別々の佛では無い、皆な同じ一佛陀である。其の偉大なる佛の中心、其の主の佛を、今話した佛陀、阿陀彌佛と申し奉るのである。御前が死を免がれやうと念ずるは、實に最もであるが、先づ自分の計ひ心を交えずに、この唯一救濟の佛陀を喜ぶが可い。靜かに味はつて見れば不幸夫れ自身が亦深き佛慮のおはす處である。」と告げた。すると其の側に聞いて居られた人が、つと起つて今の人の背を叩き「御前、具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量をお謂ひなさい」とさながら親切に慰撫せられる。私は見て居て、どうも不審に耐えぬ、早速其人に其譯を尋ねて見た。其人の話さるゝには「全体私は已前久しく病氣で苦しんで、夫れから已來常に佛を思うて居る、其の最初の因緣と謂ふが實に奇妙で丁度私の十四歳の時村で二宮尊德翁の報德會が出來、其席で或僧が尊德翁の事を觀音經の具一切功德の文を引いて話された。其時私が子供心で觀音經が難有いと思つたのが抑々の始めである。其後私は病氣に罹り苦しんで居ると、偶然托鉢の僧が來て觀音經を讀誦せられた。そこで私は内へ請じて色々話を伺うと其僧が不圖した事て語られたは、尊德翁と觀音經との因緣である。尊德翁がまだ十四歳の時隣村の觀音堂へ行かれて、堂下に座して何事か靜かに念じて居られた。すると忽然一人の旅僧が參詣して、堂上に於て觀音經を讀誦し初める、其聲微妙、深理廣大、此の時翁は了然として心中歡喜を覺ゑ、更らに再讀を請はれたと謂ふ事である。そうして此時以來翁は佛陀の慈悲此處に在りと知つて、翁の一代の事業この心から爲られたと謂ふ事である。私は托鉢の僧から此の談を聞き、翁の一生など思ひ合はして其後彌々深く佛陀の慈悲を信ずる樣になつた。夫れからは病中も常に佛を喜んで居つたのである。今斯の如き職に居る故隨分と人から恨まれ、亦激しい抵抗なども受ける。けれども如何なる人に對しても、一度佛を思ふと何でも無い、あれ計りの事と優しく見て行く事が出來る。」と謂ふ話である。之を聞く私も法を聞きて居た人も共に深く感じ、皆々共に一層深く喜ばれた。こは實に佛陀を歡んでる中より生じた出來事である。如何にも不思議て、佛天の御導きと謂ふ事、殆んど如何にあるか量る譯にゆかぬ、熟々此の御導きを思ふと、凡そ世上の出來事、一として御導きで無き者は無いのである。

偖て已上は講話を始める前に昨日正しく私の感じた處を一寸御話し致したのであるが、熟々思ふに世上の事凡て此の佛陀の御導きて有つて、人生の意味は茲に到つて始めて解釋されるのである。今日話さむとする「佛陀の引接」も矢張り何時ても申す此の御導きと謂ふ意味に外ならぬ。斯の點から頂くと、かの觀無量壽經が實に難有い。昨日九段ても此の觀無量壽經に就いて御話致したのであるが、今日も亦此の經に就て今少し深く味はせて頂かうと思ふ。一言て謂へば此の觀無

量壽經全体が御導きの經てある。釋尊が彌々成道なされて、先づ始めに世尊を見捨て世尊より遁走した五比丘を感化なされる。夫より一代の間全く感化に御盡力なされ、親、兄弟、親類を始め、上は天子より下は乞食、甚しきは盗賊の類に至る迄も皆其化を蒙つた。今や御成道後四十年、釋尊の感化は普く四海に渡り、もう申分の無いと謂ふ時に望んて、端なくも此の觀無量壽經の悲劇が現出したのてある。御存知の通り提婆達多は佛陀に反抗を企てた。此の提婆は近時の說に從へば非常に嚴格な佛弟子の一人てあつたと謂ふ事てあるが、從來は釋尊の敎團を奪ばふとした如く傳へられて居る。亦阿闍世王は提婆と結んて、父王に反抗し、父母を殺害せんと爲た。釋尊の感化殆んど完きに近いた此時、かゝる不幸の大事變が突然湧起した事は、一寸解釋すべからざる奇妙の事てある。が是れ決して徒事ては無い、惡人救濟の佛陀の大慈悲此の時を待つて初めて世に現はれて下すつたのてある。是れには實に深い意味が籠つてあると私は思ふのてある。夫は如何かと謂ふに、宗敎の始めに於ては何時でも、きわどい所迄進む、普通世間の事は決して危い際どい所迄は行かぬが、此の宗敎の事に限つて必ず一度際どい處て著しき事件が起つて來るのてある。どうも旨く謂ふ事が出來ぬが、つまり最後に極端なる事變が來り其爲め其人の宗敎の力信仰の力が試めさるゝと謂ふ場合になり、其人が宗敎を捨てるか捨てぬかと謂ふ大問題に逢着するのてある。そうして其の大事變、大罪惡が遂に宗敎を以て救はれ感化せられると謂ふ偉大なる事實が發現するのてある。我々が一應考へた處ては、佛陀のみ許に於て亦頻婆娑羅王の慈悲を以てして、如何して斯かる不幸が起つたか到底此の王舍城の悲劇は解釋する事が出來ぬ。結局の處此の際どい問題が起つて茲に彌々眞實佛陀の御光りが現はれて下すつたのてある。夫れて親鸞聖人は此の事を以て遠きに措かず、斯の如き、佛陀が此の惡人救濟の本願を事實を以て我々に御示し下されたのてあると御喜びなされてある。今日の各個人と雖も亦斯く引接の御催しと頂くべきてある。此の席へ御集りになる諸君は善かれ惡しかれ皆人生の問題に御苦しみになつた方が多い。或は一家か滿足に行つて居る方もあらう、亦行つて居らぬ方もある、或は友人間の關係が圓滿にゆける人も、反對に不圓滿の方もあらう。併し大體に何れと申せば寧ろ逆緣の方が多いてあらうと思ふ。自ら悲しい境遇に處して居ながら、唯無意味に送つて居るのては誠に遺憾の事てある。我々はどうかして各自の上に下れる此の引接の御導きを自覺させて頂き度いと思ふ。自分の事は一寸解かり難いが人の上に見れば善く此の御導きが頂ける。殊に囚人の上などに見れば實に能く解かる。賭博などして佛陀など決して解かるべきて無い人が皆解かつて來る、不思議と人の上の事は能く見えるのてある。此の御導は必しも獄中の人のみに限らぬ。現に誰でも皆蒙つて居るのだが、夫が目に附かぬ故色々と愚癡が思へるのてある。一個人一家の上皆然りてある。而して提婆も阿闍世王も決して外の者て無い自分が即ち提婆てある、自分が即ち阿闍世てあると味はれるに至つて始めて信仰の極に達するのてある。此の提婆阿闍世が確かに自分のに上に解れば、佛陀の慈悲は直ちに頂かれる。唯佛陀は斯の

如き人の爲めにと他所の事に爲て置いては、何程迄經つても開ける事が無い。親鸞聖人が「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられたは此處てある。他人の事の如く思へてる間は未だ眞實て無い、自分一個の爲めと直接に感じられて、そこて佛陀は解かつた下さる。そうして夫れが解かる迄は色々との事變が出現して來る。此色々と事變が出現して種々の御導を受け、遂に自分が惡いと感ぜられて茲に彌々佛陀を拜み奉る事が出來るのてある。觀無量壽經を一口に謂へば結局此の外は無い。佛陀の敎團全盛の最中に當つて忽然正反對の事實が出現し、斯くして佛陀の慈光が殘る處なく現はれ下すつたのてある。此迄とても韋提希夫人は佛法を喜んて居られたが、夫は唯人並に過ぎ無かつた。此の時、阿闍世王の逆害を受け、何故自分には斯る惡人の子供が生れたのかとの大疑問に接觸して始めて眞の信仰に入られたのてある。夫に就て私が昨年信濃に參つて韋提希夫人の事やら、私の經驗やら一にして御話して來た。處が非常な熱心の方があつて夫を筆記して下され、此度「懺悔錄」として出版する事になつた。夫れて先日其序文を書いて涅槃經の例の阿闍世王苦悶の後の文「如來一切のためにつねに慈父母となりたまへりまさに知るへし諸の衆生は皆これ如來の子なり世尊大慈悲は衆の爲めに苦行を修したまふ人の鬼魅にくるはされて狂亂して所爲多ほきが如し」此文を見て何時もながら實に難有く感じた。何故か信仰の事になると誰でも親に關係する傾向がある。現に監獄等て信仰を得らるゝ方の多くは皆この親の慈愛が動機になつてある。私等も苦悶の時私の父は「代はつて死ねるなら代はつてヤリ度い」と謂つて呉れた。又母は病苦て七轉八倒してる私を日夜徹宵て看護して下された。阿闍世王の父頻婆娑羅王が吾が子の爲めに牢屋の内て幽死したに拘はらず、遂に阿闍世王の爲めに安心の手引を爲られた事、亦韋提希夫人が非常なる逆害を受けながら、阿闍世王苦悶の時種々と看病を爲された事、私は人事ならず自分の上に感じて實に難有く序文を書いた事てある。殊に觀經に於て第一の對手は希提なる國夫人てあり、亦觀經全体の書き方が如何にも御婦人の方には頗る適切てあらうと思ふ。古來より大無量壽經は法の眞實を說き觀無量壽經は機の眞實を說く謂つて居る。大無量壽經に於て示された惡人救濟の絕對の佛意を始めて惡人か味はつた事實が即ち此の一部の觀經てある。觀經は畢竟實驗の宗敎てある。佛陀の引接が正しく事實に現はれたが此の御經てある。何も二千年前の阿闍世、韋提に限らぬ。諸君も私も共々に此の事實を身に味はせて貰ひ、阿闍世も韋提も皆自分に當るのだと自覺させて貰ふのてある。自分の計ひ心て此方から寸法をきめて居る間は到底わからぬ。我々は少し苦しい事になると直ちに不平を起すからいかぬのてある。自分の計ひ心を悉皆止めて、此の苦味により自分の力が何程かと感じせて貰ふべきてある。

次は斯經の大要に就きて少し御話して見やうと思ふ。昨日も九段で御話した故、或は二度御聞になる方があるかも知れぬ。韋提希夫人が獄中に幽閉せられて如何にに苦しまれたか經には「五躰を地に投じて、求哀懺悔す」とある。茲に於て佛は韋提の爲めに諸佛の淨土を明らかに見せしめられた。經

文を引用した方が能く解かる。

唯願はくば世尊、我が爲めに廣く憂惱無き處を說き給へ、我れ當さに往生すべし、閻浮提濁惡世をば願はず、此の濁惡の處は地獄餓鬼畜生盈滿せり不善の衆多し、願はくば我れ未來に於て惡聲を聞かず惡人を見ざらむ事を、今世尊に向て五體を地に投じて求哀懺悔す、やゝ願くば佛日我れに淸淨の業處を敎え給へ、

とある。韋提夫人の志が如何に切實であつたか、能く此の文に於て伺ふことが出來る。

爾の時世尊韋提希に告げ給はく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る事遠からず、汝當さに繫念して諦かに彼國の淨業成じ給へる者を觀ずべし。

親鸞聖人は此處を取つて直ちに

彼の國の淨業成じ給へる者を觀ずべしとは本願成就の盡十方无碍光如來を觀知すべしとなり(化身土卷)

と仰せられた。此れて實の處觀經は畢つたのである、玆より直ちに最後の「斯の語を說き給ふ時韋提希五百の侍女と云云」に飛んでもよろしい、眞實の所はこれて盡きて居る。夫れより

我れ今汝が爲めに廣く衆譬を以て說かむ、亦未來世の一切の凡夫、淨業を修せむと欲はむ者をして西方極樂國土に生ずるを得せしめむ、彼の國に生れむと欲はむ者は當さに三福を修すべし、

とあつて、此所より三福の說法が始まる。夫より韋提希が更らに重ねて、

時に希提希佛に白して言さく、世尊我が如きは今は佛力を以ての故に、彼の國土を見つ、若し佛滅の後ち、諸の衆生等濁惡不善にして五苦に逼まられむ、云何してか當さに阿彌陀佛の極樂世界を見るべきと、

未來世の衆生の爲めに請はれた。之に應じて佛陀は已下ずうッと觀法を御說きなされる。是れが即ち常に申す觀法である。夫れて觀法とは如何かと謂へば、斯く爲ると極樂世界が見えるといふ其方法て丁度已下拾三觀ある、夫より更らに進みて實行方面に入りて九品の說法となり、夫れて斯の經は了つて居るのてある。處で此の九品と謂ふは、我々人間の機根に種々の區別がある其九通りを指したので、第一に上品の人とは讀誦大乘等の最上善人てある。中品の人とは受持五戒持八戒齋等の人てある。下品に到つては最惡人て五逆罪を造る不淨說法と爲る最も罪惡深重の者てある。此の九種の差別に從つて相當の實行を說かれたが九品の說法てある。偖て此の拾三觀九品、是れは何て有るかと謂ふに、決して眞實の信仰其者ては無い。此の事は既に度々申すが、實は今日も夫を話し度いのてある、親鸞聖人は此れを以て我々の信仰に至るべき道行きてあると見給ふた。何故となれば試に諸君現在の所爲を見給ふが可い、我々の從來種々と苦心してやッて來た事は全く此二道に外ならぬのてある。佛陀と聞いて如何なる人難有い人と先づ自分の心て思つて見る、而かも夫が眞實てない イヤ虛假て無いなどゝ色々落ち付かぬは全く觀法の定善てある。其人は先づ自分の心で佛を造くッて夫れて信仰に近くのてある。何も定善計りて無い、凡て靜觀的修養が是れてある。

夫れて最後には、何か夢にてもしかと宣告して欲しいと謂ふ樣な氣持になる。亦後の九品の實行と謂ふは、我々か佛陀を理想として斯の如く實行し度いとか、或は宗敎的生活を實現せねばならぬとか、或は人を善く仕度いとか、人の誤解を解かねばならぬとか、各種の點より實行を試みむとする其事てある。夫れが即ち我々が步々信仰に到るの導きてある。度々申すが或人が觀經を讀誦しつゝ眼前あり〳〵と佛の御姿を拜まれた。御存知の通り觀法拾三觀中第六華座觀と謂ふがある。其處に次の文がある。

佛阿難及び韋提希に告げ給はく、諦かに聽き諦かに聽け、善く思念せよ、佛當さに汝が爲めに苦腦を除くの法を分別し解說すべし、汝等應持して廣く大衆の爲めに分別し解說すべし、是の語を說き給ふ時无量壽佛空中に住立し給ふ、觀世音大勢至二大士左右に侍立せり、光明熾盛なり、具さに見奉る可からず、百千の閻浮檀金色も比と爲すを得ず、時に韋提希無量壽佛を見奉り已りて接足作禮して佛に白して言さく、世尊我れ今佛力に因るが故に無量壽佛及二菩薩を見奉る事を得つ、未來の衆生當さに云何してか無量壽佛及ひ二菩薩を見奉るべき云云

其人一夜何氣なく斯の文を誦して居られると、空中明らかに三尊のみ姿が拜まれた。夫から其人は非常に有難くなつて、何と謂つても理屈など到底及ばぬと喜んて話された。此の實話て私には此の間の意味が判然と頂かれる。我々も其人の如く眼前御姿を拜まねばならぬとか何とか謂ふ事は少しも無い。斯れは唯引接の御方便に止まるのてある。寧ろ難有いのは拜んだと謂ふ點ては無くて、佛陀はかゝる懇切なる御引接を以て飽迄も私を御導き下さると氣附いた其の刹那、心中形ては無い姿とも謂へぬ佛陀が出來て下さるのてある。斯の如く始めは思ひ做してあつても遂には引接の御催しで眞實の地に屆けて下さる。實行の方面ても同じてある。自分は斯く爲さねばならぬ、人を善く爲さねはならぬと自らつとめて理想に近づかうとする。是れは人樣々で其の程度に九種の差別はあるが、併し要するに自己の力を賴よりにして、不可思議の佛意を忘れて居るは一つてある。最初に話した死刑の人なども是れて、何とかして死を免れ度い、死を免れるべき旨い方法があるまいなど思ふ。すると其人の前に種々無量の感が起つて來て、始めの間は色々と悶絕するが其極最後に至つて自分は最早や何を謂つても駄目てある、唯何事も佛陀の御力と自覺して玆に始めて眞實の安心か出て來るのてある。人間の計ひ心や理屈は何もならぬ。單に眞實の處へ達する道行きてある。最後に理屈も道理も無くなり、自分が善いから助かるで無い事が根本的に解かり、敵も味方も無くなつて玆に眞實の歡喜が現はれる。夫れ迄は何も彼も凡て皆佛陀の引接てある。一度び眞實の御慈悲に接して見ると、此の長々の引接の御力が能く解かる。私など若し佛陀が御出なかつたなら、盜賊になつたか殺人をやつたか、とても善く成つて居らうとは思へぬ。而して一旦眞實の信仰に入つて見れば、此の九品の差別も忽ち消滅して皆平等一味の慈悲の潮と歸して仕舞ふのてある。斯の如く味はつて來ると觀經一部全く引接の經に外ならぬ。佛陀が韋提希夫人の請に應じて未來世の一切衆生の爲

めに御殘しになつた觀法と九品、即ち理想と靜觀共に全く引接て、佛陀は其背後より慈悲の眼を以て眺めて居給はつたのである。斯くして慈悲に引き附け給ふが觀無量壽經である。今日の談話は何んとなく講義的に傾いたが、矢張り私は實感を語つた積りである。夫れて廣く謂へば詩的信仰も入信の御緣であり、自力の實行も此の懇切なる御引接である。そうして此の御引接の御力によつて遂に眞實の慈光に接して見れば、今迄は自分で勉めたと思うて居つたが、實は勉めさせて貰つたのであると解かる。此の廣大なる御恩が解かれば自然と御恩を報じ度くなる、此の上て爲る事は決して故意では無い。思はず居らうとしても想へるのである。爲ずに居らうとしても爲ずに居られぬのである。

此れて幾分か觀無量壽經が御話し出來たかと思ふ。此の觀經を直接諸君の身に引き當てゝ御味ひを願度い、必ずひしくと思ひ當たらるゝてあらう。我々が或は理想を實現仕度いとか或は佛陀を眼て見る如く感じ度いとか思ひ、又は家庭の不和を解き度いとか、此の苦痛を拔き度いとか考へる。兎角信仰など平和の時てなくては得られぬ樣に思ひ易い。こは非常なる誤解である。いま國は戰爭の最中で、社會としても個人としても觀經の時である。觀經全体が實に斯る社會、斯る個人の爲めに御說き下された者である。私など從前幾度觀經に就いて感じさせて貰つたか殆んど數える事が出來ぬ、一度觀經を措けば亦觀經を思ふ。暫くすると亦觀經が思へて來る何時でも私の御話する處は唯此の觀經一部の外は無い。此の觀經を味はつて心に叶ふ事、叶はぬ事凡て皆佛日の慈光てあると喜べば、前後左右善惡正邪、到る處悉く慈悲の世界と化して仕舞ふ。實に此の慈悲は人生を統一する唯一の道てある。諸君が人生に於て名を立てやうとなされても、旨く行けば結構だが、中々左樣は行かぬ、富貴名譽決して人生を統一する力は無い。唯佛陀の慈悲のみあつて能く此の人生を統一するのである。一の不幸來れば是れ佛陀の引接てあると感謝する、人が頭をなぐれば成程玆で阿闍世王が出來たのかと感じさせて頂く、而已ならず佛陀の慈悲は此の社會をも統一するのてある。如何に統一を見るかと謂へば社會の凡ての出來事は一切佛慈の發現てあると感ずるのである。而かも今日の青年諸君の求道の狀態は全く觀經的てある。我から寸法をきめてる方が多いのてある。我々は雨がふるとも晴るゝ共、唯佛力を仰ぐより外は無い、降るも晴るゝも共に無理に思ふのでは無いのてある。併し思へぬ時は定善的に靜觀して思ふも可い。思ふてる間に引接の御力にて自然と思へて來るのてある。一部觀經中に人生、信仰、修養の諸問題が具備して有る。化佛と謂ふも唯眞實佛陀を知らせむか爲てある。如何程申しても盡くる所が無い。

* * * * * *

悲體戒雷震
慈意妙大雲
澍甘露法雨
除滅煩惱燋

實驗

『羽村』其後の消息

一

小輪奉啓春和の折柄先生には彌陀の御懷に抱かれまいらせ愈々御淸德の御事奉賀候扨て過日は罪惡の塊なる我身の御淸淨の座に際交の御敎示に預り誠に難有奉謝候然かして此御禮と共に佛陀の大慈大悲に感泣致し候間願すれば客年當地求道會員中里兄より信仰の餘瀝一部を送られしも其の當時は「佛敎何する物ぞ惡を訓め善を勸め安心立命を需むるにあらば豈に佛敎に據るの要あらん自分には心に自信あり」など今より願みれば慚愧に堪へさる程の放言大語致し居り候然かるに程なく自身は轉任の身となり父母の膝下を辭し懷かしき故山を後ろに見て七里許り隔てし山間僻陬の里呂に赴任致し候此の境遇の變遷が即ち覺醒の動機となり親しき友に別れ懷かしき父母兄弟と別れ心淋しく日夜懷鄕に思ひ煩らひ居候此の時ふとして何の心もなく繙きて讀みしは即ち信仰の餘瀝にて第一章宗敎的同朋を再讀致し思はず喜ばしきに落涙せし刹那此の穢身に佛種の萠芽しませし事と回想仕り候其の後第二章第三章と操り返し讀ては父母の溫情に浴する樣の思にて遂に八回の復讀致し候然かして其中の變化は初めは限りなく嬉しかりし心の過去の行爲と現在の行爲とを顧みるに及て非常の苦悶と相成り遂に御話致し候通り自殺迄企て候最も境遇の上より胚胎せし苦悶には候へ共其際自分は萬一信仰の餘瀝など讀まざりせば斯かる苦悶は有之間敷事と思ひ居候其故は通常の人より見れば罪惡と云はざるべき事も信仰の餘瀝を精讀せし今日の心には非常の罪惡と思ひ做され候されど境遇は此の罪惡を敢て行はしむべく種々の方法と手段とは謂せられ誘惑は頻りに臻り候即ち苦悶に滿ちたる小生の眼には長官は恩惠を與へて自身を束縛し此罪惡を斷行せしめんと勗められ候樣に感ぜられ候萬一此時にして信仰の餘瀝を拜讀せざりし以前なりせば一方の富貴榮達に心目眩惑して必ずや甘ずべき事と存し候も當時の小生は其恩惠を受くるの甚だ喜ばしからず富貴榮達も望ましからず却て長官の恩惠を恨らみ候次第又此れと同時に前奉職致し居候官衙の長官は小生に對して交際及文通を爲すに於ては直に解雇致すべく旨其屬官に對ひて嚴命ありしとか、されど屬官の三五人は小生と最も親しく互に秘密の文韻を交換致しおり候へ共此の迫害の非常に精神を激昂致し候折柄故山の中里兄より親鸞聖人の遺訓に逢ひまいらせし折の御言葉なと引用せられし信仰上の芳翰に接し多少は心も和らき又激昂せし事の恥がしく相成り候最も其の長官なる人は狐疑するの僻性にて奉職中小生か某氏と來往する事に就ても種々の疑を懷かれ時々は共謀して陷穽の策を謀ずるには不非やなど面のあたり云はれては心も鼎の沸きし如く餘りの馬鹿〳〵しさに御賢察の通りに候など心にもなき橋詐を以て長官の恐懼に乘し增給の辭令を得ては得々たる事も有之候へ共兎に角他人の自由を束縛し權利を浸害し其の上に公私混淆も不顧私しの恨みを以て公務を解くなど實に言語同斷の處行と惡み居り候折柄の中里君の御手翰實に難有く感涙に咽び候されと之れと同時に又前述の罪惡觀は盛に深かく心を刺戟致し到底今は執務に堪ゆべからざる有樣と相成種々の迫害は踵相くとか申す程に迫り終に辭職と決心致し候されど又心は兩親と兄弟の上に及び殊には兩弟の爲め我か身を沒却致し候とも監督し社會に頭角を出さしめ以て兩親の溫情の萬分の一に酬ひ又御配慮を輕くせんとのみ務めし我か身の今斯かる事に相成候ては兩弟の監督も望むべからず兩親の愁眉を拜し候も心苦しく斯く思ひ起しては辭職するも爲し不能さればとて此の儘執務せば煩悶に死すべく進退玆に究まりて終に自殺と決心致し四月十日任地を發し父母兄弟に其れとなく秘別致すべく故山に著し其の夜御講話を拜聽致し候處他の會員諸君は非常の喜びに破入候も我身には却て苦痛を重ね候會閉て別室に會員諸君と先生の監獄傳道の事など伺ひ居り候中爲替金を改描致したる者有之候とかにて如何なる事情なれば斯かる事を爲せしやとの御尋れに對し兩親に金圓の入用を告ぐるを厭ひてとの答なりしを、又重れて尋れられ候御言葉は親に對しては斯く遠慮せればならぬ物や、との御尋れなりしとか此の一言か即ち小生の心を刺戟致し自分の心を回顧すれば今や親に遠慮し兄弟に秘して自殺を企てつゝあるに不非やと、玆に思い至りては苦悶は愈々極點に達し其の惱は地獄に落ちしとや云はんか種々の惡夢に犯かされ亡き親父の來りまして獄かせ給いしなど夢も回かなるを得ず翌朝直に先生を其の旅館に訪ひ意氣地なきも恥かしも打忘れ總へてを告白致し御敎示

に預り御言葉の節々心耳に殘りて恥かしき事さへ思ふ餘裕なく三四十分間は感涙に咽び候其れより藤井兄や鶴田君外一名の御同行の諸君と歎異鈔の輪讀被遊候ひしが此れ又難有念佛は無碍の道なり如何なる惡も恐るべかず、と讀ませ給ひし折は折角歎みし落涙の又しどけなく落ち來り候其れより汽車を同うして小生も出京致し四ッ谷にて下車致し處用を辭すべく或る官衙に趣き候處事の齟齬より目的を果たす不能、又もや迫害に逢ふて凡愚の悲しさ御教の事も忘れ果て其れより相摸の藤澤にいます姉上の許を訪ひ候も心は何となく故山の事のみ考へられ近角先生藤井兄も中里兄も御心配被下つゝあるべく此れが心掛かりにもあり歸宅仕るべく十四日午後より江の島を迂回して歸途に就き然も又心の進まぬ儘引き返し候折柄父上の御心配せられて此の姉上宅へ來られしに不計事情を述べて安心させまいらせ候事實に不思議と申す外無之其れより翌十五日父上と同道にて歸宅致し御言葉の通り今後の事を謀り申すべく候懇篤なる御示教に依り危き一命を捨て只今は我が心の汚穢を發見致す迄の光明に攝取致し候今后は只々彌陀の御引回しに任かせ、よきも惡しきも念佛を申し自然の上に復職も然からざるも任かされ候何卒〳〵御安心被下度昨の苦悶は今日の限りなき喜びに變ず候猶々此の兩三日の出來事（其の后に小生の身に成りし事）に就ても種々申上度候へ共只今は書き盡くされず何れ拜謁の上萬縷申上候末筆ながら藤井兄其の外の御一統樣によろしく〳〵御傳へ被下度亂筆をも恥ずず御禮申上候

清水子三郎

二

芳翰拜誦又も御懇篤なる御教示に預り御言葉の節々彌陀の德旨に接し候樣にて信後一層の奮勵を得候先日尊師を其の旅館に尋ね候際は心中の苦悶は宛然喞筒の口を迸出する水の如く恥かしさも忘れて苦悶を訴へ御懇切なる御說諭に預り失意と煩悶に堪へて終に自殺すべかりし身の翻然大悲の靈光に攝取し念佛の御手に救はれ候嗚呼不思議なる彌陀の誓願、其の前煩悶に沈み日夜慈光を感得仕り度焦慮致し候其の樣は宛も嬰兒の母乳を求むるが如く切にして執務の閑を偷みては信仰の餘瀝を復讀感味し終に八回に及び候、然かれ共佛書の研鑽は罪惡の自覺となり苦悶の暗霧日に深かくして前述の自殺を企つるに及び候初め商業を見習べく八王子町の一老舗に奉公致し候處其の年初度より脚症に犯かされ轉地療養の爲め郷里に歸り癒へて又主家に行き一星霜を過き又又初夏に入り病再發して今後は心臟に

又曰く

時語有友法然師　　方外風蕭過一春

其れも憂しやがて散りぬる花ならば　（自　吟）

今や眞盛りと咲き誇りし花も須臾にして散るべく入も青春の夢に憧憬して居るも運命の醜弄に果敢なく散る事を思へば又物憂き事ぞかしと自からの述懷に佐藤氏は（苦も樂も花になりたる心哉）と吟せられ尙宜はく咲くのみが花にあらト散るも又花なりと、又小生の曰く（散る花の泥に化したる恨み哉）吟すれば句意の如何を尋ねらるに即ち曰く花散りて泥に化すれば承後に於ける、花の存在何處にある、人も死すれは又斯くなん乎、佐藤氏も和し給いて（散る花の其れにも靈のこもるなり）と散りての後も詩人墨客の筆に薫る、此れ靈の存在なり人も又斯くなんと斯くして數日を送くり愈々四月十日と相成り候此の日は小生が處用を兼れて出京すべき日にて即ち死出の旅出なり、故山の父母や朋友在京の兄弟に夫れとなく袂別し十二日を以て斷然自殺すべく遺書四五通と求道を携へて故山に歸り其の夜近角先生の御講話を拜聽し（親には斯く遠慮せればならぬや）との御言葉が親にも秘して自殺を決せし自身の心を刺し其の夜は苦悶に寐ずして翌十一日終に堪へずして一切を告白し不計も御懇諭を蒙り念佛の御手に救はれし事實に〳〵不思議とこそ申せ其の日よりは喜しさに思はずして念佛を稱へ何かは知らず新聞も面白からず只々稱名のみ致し候其の後又も蹉跌ありて藤澤の親戚を訪候處眞念佛に暮らし候處十四日に至り心何となく故山に通よい父母の心配ましますべき事共思い起し乃ち歸宅すべく旅裝して出發せしも心進まれは引返して又親戚に歸り候折柄慈父の來臨ましつるに逢い愈々佛智の不思儀に感泣致し候其れより歸宅致し候處一且辭表提出せし官衙より拄けて復職せよとの趣き殊には關係諸士の勸誘に任かせ不思儀に復職の身となり尊師の囑言の空しからざるを想い候只今は喜しさの限りなく執務も手につかざる有樣にて文意前後致しおり候へ共御禮旁々更らに告白致し候南無阿彌陀佛

清水子三郎

三

拜復々々近角先生閣下御多忙中の處小生の爲め特に御尋ね被下難得法要御送付に預り誠に難有奉感謝候去月御識に預り一朝暗澹の雲晴れてよりは苦中に居て苦を忘れ惡塵の中に處して清淨なるを喜び殊には自殺と迄決心仕り候小生が其の儘の境遇に處して平然として執務する事を得せしめ給ふ茲に於て一切の苦の根は斷たれ超然又生を裏くるの要なし嗚呼不思議なる彌陀の誓願罪惡の塊なる我が心に一條の微光仄見へて精神界の大旋風を起こし終に自殺すべかりし身の今は歡喜に心躍り時としては眞摯なるべき信仰にして斯かる有樣を演ずるは其の信仰にあらぬかなど自から怪しみし事も有之實に〳〵昨今の狀態は其の心中の投影にて其の微妙の點は言語に盡くせず、禿筆に記せず候、昨十五日に出京の途次郷里に一泊致し中里法兄と十二時を過くるも知らずして信仰の實驗談に夜を更かし候其の趣味言ふに語なく尙一大變化が來たせしは元來理窟好きの小生が理窟か問數事の面白からず新聞すら讀む事のもどかしく又常に好みて讀みし小說も人情の眞髓と微妙を穿かちし歎異鈔に比しては一顧の價値もなき樣思はれ候、實に〳〵不思議と云はんより外なく唯心に委かせぬは就寐の際其の日の行爲を反省候へば一々主我の現象たる義にて慚愧に不堪候扨て求道第四號に次號の求道に小生の告白を掲けらるゝ樣相見へ候處其の當時歡喜は胸に溢れ口を衝いて出て候者を書き連れし次第にて前後の箇所も有之又は他人の身分に關わり候事に有之べくと存し候に付一ト先御見合被下度間より 佛陀に告白せし者なれば告白せし其の心は善あしの境を超絶せし義に候へ共其れが爲め他人の名譽を毀り候樣の事ありては如何やと存し候され共先生の御心にて掲け給はる思召にて候へは決して差支は御座なく又小生も其の人をして自覺に導くの動機ともなるかと思ひおり候何れにせよ御考にまかせ候に付右承知被下度愚弟にも歎異鈔を領知候處其の意味を知るに苦しむなど申し來り候故追々悟り出來べくと申送候先は御禮旁々近況御一報申上候也

老なきを求めて老なきを得病なきを求めて病なきを得苦なきを求めて苦なきを得死なきを求めて死なきを得然れば最後の生なるか南無阿彌佛陀佛

清水子三郎

近角先生　　机下

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

母の愛と佛陀

本谷暢音

如何にして自分は死すべきやの問題に就て自分は考へた、樂しく死することが出來ぬならば苦しくとも自分は死なればならぬ、縊れて死なうか、鐵道にしようか毒藥にしようか刀劍にしようか、瀧にしようか、噴火口にしようか、と種々死すべき方法を擇んだ、死は實に自分に向つては唯一の希望であつた、死の外には自分は何も欲しく無かつた、何故に世にも恐るべき死が自分に取つては母の腕に倚るやうな安い思のしたのであらうか、自分は善は爲すべし惡は爲すべからず人は何所までも公明正大ならざるべからずてふ信念を有して居たので世人凡てがその意になりさへすれば世は實に圓滿にゆくものである、故に自分はこの理想に向つて努めねばならぬと思つた、而して自分が或る位置を得れば此の理想を實現するべく容易の事であると思つた、而し事實は左樣行くものでないといふ事を東京に來てから思ふたのである、そこで自分は一歩進んで考へた、人は何故に善を尊んで惡を卑むのであるか強食弱肉此の地球に修羅場を現出したつて構はないではないか、地球を樂園とすれば何であるかと、其の根本の問題に就て解決を欲したのである、然しながら藤村氏の所謂不可解なる三字を出づることは出來ないのである、右から考へても左から考へてもどう考へても不可解であつた、今一歩進んで、それに解釋が與へらるれば自分は如何すべきや與へられれば如何すべきやに迷ふたのである、自分はこの不可解の中を東に西に逡巡して益々迷闇の中に葬り去られて仕舞ふたのである、此の人生問題に苦しむで居る青葉の雨の夜即ち明治三十七年五月二十五日の夜であつた、自分は高等漢文讀本の卜居を讀むだ時大に自分は眞心の呵責にあふたのである、其の文章の文字は實に活きて居つた、その文字は大に自分を罵倒したのである汝僞善者よ汝は何故に赤裸々になつて仕舞はぬのであるか、汝の口と汝の心とは何故に表裏があるのであるか、汝は實に大野心を抱けるものではないかと實に自分は胸が張り裂けるやうな氣持がしたのである、其の活文字が自分を嗤ふ聲罵る聲は益々高く強くなつた、而して其聲の奥には確かにほとばしるやうな熱情親切があつたのである、而して自分は其時同居して居た友人を捕へて自分の惡かつた事を懺悔したのである、其後は自分は心が實に爽快になつて穢れは凡て洗ひ去られた樣な氣持がして身も心も輕くなつたのであるそれと同時に自分の愚にして無能なる事を自覺したのである、實に自分は淺間しいではないか人生とか善とか惡とか宗教には間接の問題に迷ひ右の左のと愚圖々々して居るのを絶待の偉大なる慈悲はまだ汝は迷ふて居るのか躊躇することは無いではないかと懌れと思し召して此直接の好機會を與へて下さつたのを、即ち自分の頭の上から攝取の光明を拋げて下さつた其の深き御力を悟らないで自分は又た慈光の中から飛び出して逃げだしたのである、自分は何故にこの慈光の明るい道を歩まないで他の暗い道に反れたのであらうか、自分は大僞善者であると思ふと直ぐに主觀を離れて一より十を推したのである、世界は僞善者の寄り集りであると思ふと同時に自分は御慈悲に甘へ過ぎたのか自分は公明正大なる立派な者であると少くとも心に畏にかけたのである、それで此僞善の世と共に活きる事は自分はいやになつたのである、虛榮を張つて名譽や位置を得んがために汲々として毎日齷齪として理屈をつけて僞善の面を被つて居る、人生の目的はどうとか、かうとか、實に馬鹿らしいではないか、人間に樂を得んがためにはうれ以上の苦をせねばならぬ、結局苦の方が多いではなないか、文明とか向上とか何を一體いろ〳〵並べて居るのであるか、自分は僞善の世にそれ等と同十層で僞善を持つて変る事は出來なかつた、眞情を以て行うしすれば自分は馬鹿正直と罵らるゝのである、古往今來學者は澤山あり彼等の説く所年々歳々其の説明を變化して行くではないか、春夏秋冬時ありて咲き時ありて散れどもそれを年々繰り返して其の終局の目的は何であるか、唯それだけの循環ではないか人はたゞ食ひ寢れ、働き五十にして死す實に馬鹿々しきものではないか善にせよ惡にせよ長にもせよ短にせよ聖にせよ愚にせよ華覓する所遂に墓門ではないか、寧ろ始から生れなかつた方がよいではないか、されど不幸にして母の乳房があつたゝめに事實として生れたのだから迷の中に深入りをせぬ中に早くもとの死に歸つた方がよいではないか自分は一體何しに來たのであるか、自分は全體なんであるか、實につまらないではないか、早く死に歸つた方が樂であると思ひつめて死を決めたのである、同時に一方からはどうしても自分はこの世に醉ふことが出來ないのであつた、名譽に醉ふて居る間は勉強も出來發傑とならうと思つた時には精力も出たが已に自分は無能である學者になる事も出來れば英雄になる事も出來ぬ位か、自分の身體の始末すら出來ぬ愚かのものである、何故に自分は益正月を樂しみに奕碁に甘んじて行く一文不知の農夫とならなかつたであらうが、否々自分は何故に馬鹿や狂人とならなかつたであらうか、何故自分は智恩の木の實を味ひ初めて文字てふものを知たのであらうか、自分はこんな事をいふと意氣地無しと笑はれるであらう、汝勉めよ汝勵め彼も人なり吾も人なり精神一到何事か成ざらむといふであらう、然しそれは已に遲し、自分は自分の勤勉に依つて理想の凡てを實現することが出來るとしても自分は其等に何等の趣味も價値も見出さぬのである、見出した處が五十年にして水の泡の大海原に含するのではないか、死といふ先きは見えて居る、そんな入らぬ骨折をして苦しまんより寧ろ今墓門をくゝつた方が簡單で最もよいと思つた、絶對の無限の慈光の中に包まれて居ながら其れに氣が付かないで、益々絶待を疑ふたのである、天は何故に自分を此の世に出して斯くも苦しめるのであるが、自分は親が無かつたならばこんな苦しみをしなかつたであらうにと遂には不幸にも海山深き御恩の親を呪ふのであつた、自分は此の世界に生るべき筈のものでないのに誤つて此の世に來たのに違ひないと、生れ難き此の世の人と生れ遇ひ難き此の佛陀の光明に接しながらも浅しい恐ろしい心を起して、永遠に怨を呑んで死を決したのである、其時直ちに自分は死れればよかつた、而るに絶對の御慈悲は此所にあつて自分を殺さざるべく他の事件を出して下さつたのである、其時自分は死する理由を誰にか知つて貰ひ度くなつたのである、奇を衒ふとか、命を輕んずるとか非倫理だとか、入釜敷くなるのも良くないて（死する自分には何等の關係はないが）房州に避暑に行て居た小學時代からの無二の親友に委しく自分の爲めに自分の死を親福して呉れる樣に書留親展で送つて自分は胸中に肥後の阿蘇の噴火口に投ずるべく秘めて後を眩まさうとして西下するべく準備をして居た、而るを友人は早速歸京して自分に贊成して呉れるのみか大反對であつた、彼は自分には親や兄弟のある事大責任ある事を思告して自分の意氣地の無き事を責め何故に東京に來て居るかを責めて呉れたのである、然れども自分には何等の動く色も無かつたのである、絶對的自我で他に對しては水のそれの如く冷然たるものであつた、親が如何に苦しまうがまだ十年か長くて十五年の内には死するのである、此世で苦しむだ處て多寡の知れたものである、自分が獨り死んだ處で、親不幸になつた處て大なる宇宙の歴史に關係するではなし、責任も名譽もあるものかと、自分は死の國に瞳がれて居つたのである、然るに偉大なる力は到る處に充ち滿ちて居つて自分の死を遮るべく間接にまた一事件を出されたのである、此の親友の身の上に大事件が起つたのである、彼は今ま危き運命の奈落に陷ぬらむとするのである、自分は自分の問題は其儘にして獻身的に彼の爲めに盡した、而し自分の腦裡の苦悶は脱することは出來なかつた、否々自分の苦悶は益々激しくなつたのである、自分の問題の解決のまだ就かないのに人の事件までも自分の頭の上に落して來る運命を自分は怨むだのである、

自分は此の二問題の爲めに實夜胸を痛めて氣力も何も盡き果てゝ自棄になつてしまつた、已に死もなく生もなく茫然として只だ寂寥を好むのであつた、晝間人の活動する間は夏の暑きにも拘はらず戸を占めて亂暗闇にして寢れ、夜は人の靜まりたる頃より千駄木林町の太田ケ池、東叡山の欝蒼たる老杉の下などに腰を下ろして眠むるともなく醒むるともなく曉に及むで露にぬれた衣を重く足を下宿屋に運ぶのであつた、無茶苦茶に淋しい滅入る樣な所を好むだのであつた、無論衛生も何も眼中に無いのである、食事は少しもやらぬ、毎日苦悶をやらむために酒を呑むで居たのである、されど却て苦悶を重くするに與て力あつたであらう、此時は理窟をつけて考へるなどの端的はなかつたので正しき狂人の資格はあつのである、お菓子をやつても密甘をやつても拗れて泣く子は致し方の無いもの佛陀がかほどまでも思ふて可愛がつて下さる御慈悲も御親切も知らないで自分は何を下さつても拗れて泣いて居たのである、而し如何に泣いても拗れても助ければ止まざる偉大の御力は何時何處に御手を回して居るか分らない自分を救はんの思召て父母兄弟の犧牲として否々父母兄弟と委をかへて御苦勞遊ばして自分を導いて下つたのであつた、それに自分はまだ拗れて泣いて居たのであるかと思ふと誠に斷腸の思に堪ねないのである、自分は慚死しても足らないのである、古郷の妹から雁の便りがあつた、家政の都合上、父上は歸省する樣の仰せだけれどそれでは兄上樣も折角上京せられて殘念でありませうから、父上は及ばずながら自分が御力うへを致します故獨立で勉強が出來るなら成業して歸つて下さいといふ意味の手紙であつた、いくら自分は冷かになつて居ても元來情の子、此のやさしい妹の手紙に接して動かされざるを得なかゞたのである、思ひ出では纒ヶ涌出し來り、自分の死といふ問題は何時の間にか此の思ひ出の爲めに場所どられたのである、願みれば樂しく賑かで和氣靄々たりし數年前の我が家庭は不運の雲に閉ちられて自分の杖とも柱とも頼む弟を始めに、亡て妹、其の弟、祖母と毎年一人づゝ木をき

るやうに亡くなつてしまつたのである、而して最後に一家の愛の塊りてありた處の母上、敷ある兄弟の中でも自分を一番愛して下された母上も遂に一昨三十六年晩春花の蕚に散ると共に亡き數に入つたのである、實に寂しき朝夕となつた、五月雨の夕ぐれ淋しき思に堪えぬ時は今は女々しく泣く時にあらず此の冬がれの野にも花咲く春を作り出さうと思つてすがりつく妹を振り捨てゝ悲しみ玉ふ父上に家事を賴みて上京したのである、自分は實に大責任のあるといふことを、今更のやうに感了たのである、死とか無常とかいふて居る時ではない、若し父上が自分の精神狀態を御覽になつたらどんなに失望なさるであらうか、嗚乎自分は實に父上に對してすまない、父上は今どんなに御寂しい日を送つて居るであらうか、母は此世にあらず自分は東京に居るし、十三と十五の妹二人を相手に家事を執つたり學校に出したり、實に慕ない運命の上に居らるゝのである、父上が自分の爲めに慮せらるゝ事はどんなであらうか、腰も弓となつたであらう、齒も缺けて頭も縮が深く肉痩せたであらうと思ふと實に自分は立つても殿ても居られぬのである、西東も分らぬ時から小學と中學と卒業さして遊學までさせて下されたが其の御苦勞はどれほどであるか、自分がこゝまで育つたのも隨分煩がゝらぬ年月であつた、それに數年前より打ち續く不幸家政は益々傾くし老の御身を以て東奔西走自分のために御心配なされし事はどれだけであるか、嗚乎自分は父上の肉を食ふよりも苦しい思のするのである、自分は迚も悠閑として居る時ではない、實に大責任が自分の頭の上より降りかゝつて居るのである、自分は子は親の犧牲どなるために生れたのであるといふ解釋をした、而してそれ以外に根底は定まらなかつた、若し親が亡くなつたならば自分はどんなになるであらうか、分らない危き基礎の上に立つて居たのである、苦しみの結果遂には親を殺さうかと思つた、殺して平安の都に到らしめ自分も直に其跡を追て人にも死の樂しき事を知らせようと、實に鬼を見た樣な心を起したのである、然し事實自分は其れまでの勘行も出來なかつた、まゝよ死せしと思ひしこの身體どんな事でも爲て見よと盲目的に奮闘するべく決心した、而しまた根本の問題が決定されぬから、何をしても不安の念に堪えない、現今の大家は如何なる生命を有して生活して居るか、死よりも樂しき道によりて活きて居るか、これを聞いて自分もその活くる方法に從ひたいと思ふて寺や教會にゆき講話や演說を聞いて見たけれど自分の安心のできる樣な說明はないのであつた、浩々洞にて(door is open)なる語を得て死は何時でも

出來る急ぐに及ばぬ戸は開かれてあるから死ぬるまで働けと思ふて自分は無我になつて事をなすといふ考で大に奮闘した、而して自分はといふ考は確かにあつた、故に無我でもやはり苦しくて堪まらなかつた、而し善でも惡でも、意味があつても無意味でも奮闘を充分に試みた、けれども何等の樂しみはなかつた、而して自分は物質的に精神的に苦しめられた、うれから厭世觀から無常觀に這入つた、草木の影も痩せた秋の九月六日夢に亡き母に遇ひたさに堪えなかつた、石のそれの如く冷たくなつて器械のそれのやうに働く自分は凡ての友を失ふて訪れもせず訪れられもせず只だ一人の親友に時々逢ふけれ共彼もある事件のために忙しく、たまさか逢ふ折は慰められて友情の有り難き事も味ふたが又術突もあつた、自分は友情以上の愛を欲したのである、乃ち亡き母を思ふこと切となつた、心淋しさ今昔の感に堪えず實に移れば變る世の無常をかこち、老父を懷ふては古郷を想像し無常觀は益々ひどくなつた、ある事情より無二の親友と西東に分れることとなつた、秋の木の葉も散りて冬の時雨となつた時自分は此の宇宙の廣き眞中に唯だの獨り者とたつて仕舞つた、世は旅といふ獨り旅ほど心細い事はない奚ま十りの雨が寒風に吹かれて枯れた落葉に音をさせる時に自分の歷史の昔しを懷ふ時涙を分つべき人もない身となつた、自分はパン問題に苦しみ營發不良のために神經衰弱を起して狂人ゝみたものとなつた、毛髮は一尺に近くまで延び肉は落ちて骨のみとなつたのである、古郷の父上がこれを夢にでも御覽になつたら如何に御氣遣ひ遊ばしたことであつたらう、自分の古郷からも遊學生は澤山あるけれど、勿論自分の淪落は知らなかつたのであつた、

此の場合になつてはもはや何をする氣力も無い、いつも室内には居たゝまらず、書物など讀む事は迚も出來ずせめて讀まんと强いて手にすれどそんな餘裕はないのである、只だ飛び出して外出するのであつた、旅の空に人を失ひパンを失ひ落魄の人となつては亡き母上がまだ世に在す時暖かき眞情を以て吾等を待たれし事を思ふて、顏はくぼこゝ一瞬時でもよいから親しき母の笑顏に接したい、此の境遇を見てもらうて甘へて見たい泣き得るだけ泣いて見たい、歌へて見たいと思つた、自分は死せし人が再び婆婆に歸り來る事を信ずるまでに常識を失ふたのではないが、無理でも破理でも遇ひ度いのであつた、愚である、意氣地が無いと笑はれても、自分は此の愚此の意氣地なしになつた爲めに光明を認むる事が出來たのである、母の亡くなつた意義も了し得たのである、人生問題の解釋も得た、自分は思つ

た、自分が亡き母を要求するのは無理である、而し人生はみな無理のみ望みて行くのである、儘になるならあゝもしたい、かうもしたい、と而してこれが皆な思ふ心と事と相違するので始めて人生の意義を了解することが出來るのであると、自分は唯だ一人高くいざよふ雲の消えゆくを見ては人の世の墓なき事を思ひ道行く人を見ては不安の念を生ず心臟の動機も激しくなつて目も眩まんばかり、木の葉の風に散るを見ては其葉に何等かの意味がありさうで、其葉の如何なる運命をもつて居るかなど其跡を追ひ淚に流るゝを見て其の果てはどうなるかなど凡ての所有ものを悲觀して晝も夜も天も地もみな自分の爲めには自分の心を暗黑に導き迷に入らしむる媒であつた、かくて自分の四圍は皆な暗黯たる黑雲のみであつた、小石川白山、田端の田の畔、道灌山、日暮里、高等師範學校裏の芝生に雲を眺めるのが例であつた、而し雲を樂觀したのでは無い、層一層の悲哀を感了滅入るのであつた、此の悲哀が自分の唯一の友であつた、而して自分は此の悲哀の極母なくては活くる事は出來ないのであつた、自分は名譽も位置も金も寶も欲しくは無い只管らに亡き母の愛を欲したのである、此の愛を得なければ死すとも其の恨みは永久に綿々として絶ゆる期がないのであつた、而し母には如何にもがいても泣いても逢ふ事は出來ぬと明らめやうと思つた、而しなにか自分は求めれば止まぬのであつた、而し自分の精神の不滿足を充滿するべく何ものもなかつた、自分は失望した自分には何も與へられぬのである、生も與へられれば死も與へられぬのであつた、たゞ茫然として求むる處も與ふる所もなかつた、心も身も自然の成り行きに任かせた、而るに忘るべからざる昨年十一月廿六日第二求道學舍の前を通り懸つて講話のあるので何氣なく立ち寄つた、而して近角先生に寂しさを訴へたのである、先生は懇々御話しをして下された、而し自分は要領を得なかつた、先生は非常に同情せられて何時でも寂しい時には御出でなさいお話を致しませうと實に親切に手を取るやうにして下された、それから自分は身方でも得たやうな氣になつて先生の御忙がしいのも遠慮せず翌日も翌々日も先生に訟へたのである、先生は御聖經やら雜誌やら出されて道を說いて下された、而しまだ自分は要領を得なかつた、徒らに苦しみ悲觀し無常觀は益々極に達したのである、而し幾分の希望は出來て第一、第二の求道會に講話を聞くのが唯一の樂しみ唯一の慰藉であつた、十二月十七日の自然法爾の講話は實に自分の終生忘るべからざる自分を活かして下さつた眞の親であつた、其の歸るさに自分は嬉しくて嬉しくて堪まらず獨り肩を怒らして雀躍して微笑みつゝ歩を密に運むだのである、人は狂人と見たてあらう、今までの暗雲は拂はれて實に氣分は爽快となつた、今迄何故に天はかくまで不公平であるか、何故に惡しき者に幸福を與へ正直なものに薄倖なるかと思ふて居たのは皆な自分の誤りであつた、不幸なれば不幸なるだけそれだけ慈光に接するのが早いのであるのに、今まで自分を苦しめたと思ふた事實は皆な惡く自分一人のために意味のある生きた事實となつたのである、自分は始めに人生問題の解決を得むと欲して得ず、母の愛を求めて得ず、あるものを求めて得ず、得むと努めた時には一も得る事が出來なかつた、圖らずも自然法爾として自然法爾の講話から自分の過去の歷史に意味が出來て宇宙凡ての現象は無形にせよ有形にせよ皆な自分一人の爲めに活動して居る偉大なる力であつて天下の凡ての人が滔々として涅槃界に流れ込みつゝある事を覺らせて貰ふたのである、これを不思議と言はないで何を不思議といふのであらうか、自分は人生の意義も解した、亡き母上とは肉體的に見る事は出來ないが精神上に於ては確かに融合する事が出來るのである、偉大なる力の能く行き屆て居る御慈悲の宇宙にみちみちて居る事を知らないで、もがいたのこそ實に慚愧千萬であつた、佛陀は母の愛となり母の死となりて導かれた事を知らなかつたのは實に淺ましくも愚かな事であつた、南無阿彌陀佛。

* * * * * * *

有情輪廻生六道　猶如車輪無始終
或爲父母爲男女　世々生々互有恩
如見父母等無差　不證聖智無由識
一切男子皆是父　一切女人皆是母
如何未報前世恩　却生異念成怨疾
常須報恩互饒益　不應打罵致怨嫌

《報恩品》

靈蹟

五臺山探勝記

菊池秀言

行と廿里連峰峭拔にして繞繚攢蹙す細路僅かに八尺許、斷崖絶壁の間に通ず俯して谿間を瞰れば暗黝萬仞慄慄焉肌粟を生ず四驢魚貫して上る石滑かに蹊濕ひ驢屢は顛卧す山の極て峻きものを長城嶺とす上れは則ち白雲開闢歸然洞濶前に過る所ろの峰巒悉く變して小岡の如く歷歷算す可し物象雄偉殆と天風に御して六合を下瞰するの概あり而して長城伏蛇數十里壁半は頹壞す嶺を下て始て臺懷に到る夕陽西に沈む頃ひ射虎山臺麓寺を過く康熙帝此地に臨幸して猛虎の叢薄間に隱現するを見る親ら弛矢を御して一發之を殪する舊蹟なり大喇嘛一人を置て寺務を掌らしむ境内親撰の碑あり石嘴舖に泊す此日行こと八十里

廿七日曉發南臺の下を過く異香馥郁鼻を撲つ中臺懷を歷て闢門を過り市廛に入る石塔巍然雲を凌き虛に乘す黃碧殿堂翼乎高曉粲然日と對映す行こと數里菩薩頂に上る頂は宛も西天の靈鷲山に似たり舊に靈鷲峯と稱す丹壁峯さ二里王喇嘛なる者予を延て客堂に請す乃ち雍和宮洞濶爾の文書を出して札薩克に交附す一室を淨掃して予の自適に任す此日行こと六十里

�按するに菩薩頂は山寺の最も宏壯なるものにして歷代の崇奉貧かに他に異り後魏孝文帝大孚靈鷲寺を建て十二院を環置す其中の菩薩頂なるものは即ち今の眞容院なり後唐僧法雲聖像を塑造せんと擬す塑工安生なる者と相共に至心懇禱して眞身を現せんことを求む一七日を經て金像を顯現す便ち圖模望成す宋明の崇敬を歷て清朝に至て殊に崇奉を極む康熙帝三ひ寺に臨む毎に駐驛す乾隆嘉慶の二帝同く此に駐り賜賚甚た多し今尚西藏僧を聘して札薩克大喇嘛に封して圖山を管理せしむ

三時札薩克を見る蒙古僧數人前導す二ひ闥を過て庭院邃奥の處に至る客堂に入る西藏僧姓魯なる者來談半頃漢藏滿蒙の四語に通す僧に大堂に抵る札薩克石壇上に坐す胡漢僧左右に侍立する者數十人穿つに紫衣を用ふ予携る所ろの彌陀小繪像及ひ淨土三部經等を贈る札薩克藏語を用て予を慰て曰く關山萬里備さに辛酸を嘗む求道の志太た感す可し安心休息宜く家に在か如くなるへし左右を顧て曰く用意照應毫も慢待すること勿れ予曰く某千里を遠しとせす靈境に游ふもの一は則ち聖像を拜觀して宿念陳請し一は則ち上座に接して黃教の淵源を聆んと欲すれはなり札薩克曰く青黃岐を分つと雖も元來一佛の法弟たり留錫多日徐かに靈區を巡拜すへし話し罷て奶茶を啜り番菓を喫す本朝の僧軌北京の豐囚寺を連問し晩間室に回る翌來胡僧時を隔て安を請ひ二人の皂隷毎に左右に侍す懇待優遇凡て豫期に出つ

廿八日下雨恭く、殿堂を拜して香を拈る先大文殊殿に上て菩薩騎獅の像を拜す稽首禮を作て彌陀經を誦し窃に念言すらく時澆濶に屬して聖道の信解行證皆な修養に耐え難し特に彌陀の本弘誓願のみ下根劣機を憐愍したまふ大士亦た法照禪師に示すに念佛三昧を以てす予頑魯の資而も宿因深厚にして生

を日本帝國に托し指を見眞大師の流義に染め他力の教行信證を奉行して行住坐臥全く以て私無し念念唯た報恩の經營に外ならず此を以て庶民を導んと欲す願くは之を證誠したまひ方今正道廢頽人多くは邪徑に趨る曇鸞道綽善導の他力念佛は中華に在て之を首唱する所而して如今切實に要路を求るの士に乏し願くは大智炬を燿かし大慈悲方便を以て正法を宣揚せしめたまへ重て偈を用て曰く

生死無レ窮海波翻。漂泊難レ度久沉淪。智眼瞎兮行足蹇。敎岳戒峰杳難レ攀。往昔値レ佛積二洹沙一。發心不レ契幾逡巡。幸遇彌陀法皇大弘誓一。慈光爲レ緣信爲レ因。至德風靜衆禍轉。穩托二慈航一到二樂濱一。歎彼中原法運塞。曇鸞善導眞門閉。白光曾導法照師。慇懃誨二念佛三昧一。吾來二東海一禮二慈尊一。至心恭敬徹二六根一。泣二陳文殊師利法皇子一。普傳二大悲一而眞報二佛恩一。

聖靈儼として頂上に臨むか如く感極て泣血滂沱起つ能はす嗚呼是何の日そ我高祖大師の彌陀の淨刹へ還歸したまふの忌日也身を起して經行す西藏の經函あり小佛像を供する擧て數ふ可らす境内に中臺演數寺の碑及菩薩頂大文殊寺の碑あり五臺聖境五峰化宇と題する勅額あり康熙帝の御筆とす次に配殿に上て釋迦牟尼佛の像を拜す次に一闥を歷て釋迦殿に上る三尊釋迦五百羅漢を拜す西藏の經函あり又配殿に上て長壽佛を拜す次に東殿に上り文殊猊に騎し力士拉し來るの像を拜す次に西殿に上て獅而六手足の像を見る喇嘛曰く是をシャクジャラ佛と稱す黃教に於て最も尊ふ所ろなりと予此像を各寺に於て見るもの頗る多し蓋し是れ大黑神なるへし摩訶迦羅の轉訛せし音に非さるなき歟弘法大師の秘藏記に曰く摩訶迦羅は大黑神にして三面六臂あり大惡忿怒形なり赤火炎あり鼠蛇あり瓔珞は髑髏にして象皮を衣となす又は八思巴上師の高弟に膽巴なる者元の世祖を輔けて摩訶迦羅神の靈威を顯はすことを載たり趙子昂の書せる膽巴の傳に五臺山に於て道場を建立し秘密咒法を行ひ諸の佛事を作す摩訶迦刺に祠祭し持戒甚た嚴也と然れは則ち喇嘛教は眞言教に類すると知るへし復た進て一闥過て大殿に至る中央釋迦佛を供し傍に五頂文殊を供す銅を用て像を塑る配殿導師佛を供す階を拾て閣に上れは中央宗咖巴の像を供す兩旁に達賴班禪丹巴等の像を供す簷下奇石あり闊一丈黑色圓形唵嘛呢叭彌吽の六字を輪刻す石を以て之を打は鏗鏗銅音オンニバメホンの六響を成す相傳ふ大士此を袖にして帶來せしものと按するに此咒は觀音の大明咒にして蒙古人は古來唪誦す現在蒙古喇嘛は之を誦して口に絶えす之を質すに皆な南無阿彌陀佛の六字に同しとす小栗栖香頂師は西藏にて阿彌陀と稱するは即ち密教に說く所ろの佛也彌陀觀音因果不二なれは彌陀如來即ち觀自在王如來なり故に之を彌陀の名號に配すること由致なきに非すと曰ふ予の信仰より之を曰は觀音大士彌陀法皇の協士なり彌陀の慈悲を賜はり常に方便を以て六道有緣の衆生を化導す故に簡易なる六字心咒を以て蒙古獰惡の俗を化して淳良の風に移し伴を主に歸し末を本に屬すれは唯一の彌陀名號あるのみ嗚呼六字の名號實に不可稱不可說なる哉一室大鍋二あり周圍四丈臘八用て飲を炊く一鍋四百人の食に供すと云ふ又參呢殿あり宗咖巴明照長壽梅怛羅等の佛を供す鍍金塑像高各一丈造工精巧なり雨彌々下り路

滑かにして遠く出る能はす乃ち寓に回る

二十九日陰霖空濛王喇嘛來訪して予に舍利子二粒を贈る此日疑問二十條を書して札薩克に問ふ

三十日雨未た霽れす寒暑表六十度土人凡て爐を開き羔裘を穿つ適ま中庭を徘徊すれは北臺屹然玉冠を黑雲の表に露はす孤客を慰るもの、如し、

卅一日天霽る南して廣宗寺を訪ふ上殿に釋迦佛像を供す明正德二年勅建す銅瓦殿と稱す康熙の御筆雲嶂の匾を揭く次に圓照寺に詣す中庭碑を建つ明天順の上諭を刻す前殿に釋迦佛像を供す左右十六羅漢の像あり明藏經函あり後に文殊殿あり白毫光現の額を掛く康熙帝の御筆たり次に顯通寺に詣す樓閣殿堂奇巧巨麗實に諸寺に甲たり先文殊殿を拜す像高八尺四川王氏の創る所ろ進て中庭に入る石樓軒然粉堊丹楹擧な成軌あり宛然西人の巨房たり釋迦佛蓮臺に坐す鍍金を用て作る左右五百羅漢の崑崙上に站立するの像を揑す石殿上圓かにして下方なり蓋し華嚴道場の一華百億國一國一釋迦を表するもの匾二統あり皆な康熙帝の御筆なり後院銅塔四笈あり彫刻精巧目を驚かす石壇上一銅殿あり濶三間深二間鍍金文殊像を供す相好柔和頂上三佛頭あり右手劍を提け左手蓮華を執る銅扉に萬佛を彫刻す又鍍金小佛像枚擧に遑まあらす燦然相映し人目相輝く自ら肅然敬屈の意を生す配殿竺蘭の像を供す肥面鵰眼長耳宛も楠公の像に似たり是を第一世祖師とす

按するに羅山諸寺の中創建最も古く崇奉世と替襄せさるものを顯通寺とす漢明帝の時摩騰法蘭西より至り此山は則ち文殊の住處にして兼て佛舍利あるを奏す勅して寺を建つ額を大孚靈鷲寺と賜ふもの是也後魏孝文帝重修十二院を環設して茲刹を擁護す前に雜華閣あり唐太宗復た修建を加ふ則天の朝改て大華嚴寺と爲す清涼國師錫を駐て疏を造る明太宗瑞熙を感通して特建して顯通寺と改稱す永樂壬午葛里蹤尊者を西土に聘し此寺に居らしめ重て修す僧祿司を增設す清朝に至て崇奉前代に軼す康熙帝蹕を駐て宸翰を頒ち賜ふ

南して大寶塔寺に詣す寶塔巍然雲霄に屹立す阿育王の舍利塔と傳るもの明永樂五年始て寺を建つ圓形堅石神燈夜燭らす清涼第一の勝觀也進て上殿に至る文殊の像を拜す中央に塔あり高三丈僧曰く經塔也と予以て大士の髮塔とす塔基暗室に在り燈を照して進む黑闇咫尺を辨せす數人力を翕せて基距を回轉すれは塔動くこと風輪の若し昔者大士貧女に化して髮を遺すもの樓に上て塔頭を見る多く經函を供す印鍔鮮明にして裱裝金襴本邦に在て未た曾て觀さる所ろなり此境内に蒙古紳士の畫夜五躰投地の禮を爲すあり苦行甚た力む西に折て殊像寺に至る殿に入て香を燒く大士狻猊に跨るの金像を供す高丈六餘迅舌を吐く懾懾焉肌に粟を生す康熙卅七年帑金を發して建る所ろ後殿釋迦佛及十六羅漢の像を供す右に折て行こと數里梵仙山を獲たり攫して上ること三里流汗背を濕し喉間聲を成す山頂に登臨すれは雄風颯颯廟古り壁頹る入て山門を叩く一翁鎖を啓て殿に導く梵仙の小像を供す便ち石に坐して茶を喫す昔此山五百の仙人あり菊を餌して道を成る跡に於て寺を建つ時に猛風驟かに起り東西飄颻駭然山を下る東して廣安寺に至る今稱して文殊寺と曰ふ黄派に屬す前殿宗卧巴を供す後殿釋迦佛を供す阿難目連左右に侍立す傍に十六羅漢あり復進て後殿に至れは千手佛を供す頭上五佛頭連り左右手伸て一千手を連環接着す燦爛として光明の如く銅を用て之を造る蓋し我朝

の千手觀音なり門を出て十方堂に入る前殿文殊の像を供す後殿宗卧巴を供す左右鍍金像並に一萬佛像あり相傳ふ同治年間蒙古王の建る所ろにして廣安寺の支院たり復た舊路に沿て行く羅睺寺に入る結構眞容院に亞く匾數枚あり多くは康熙乾隆二帝の御筆たり其最奇なるものを後殿開華十佛とす銅を用て十蓮華を作り中に佛軀を包む寺僧開旋葉開けは則ち佛を露はし華閉れは則ち佛を見ず蓋し龍樹大士の若人善根を種て疑へは則ち華開けす信心清淨なる者は華開て則ち佛を見たてまつるの謂也佛敎に入るの門は信仰にして懷疑の見に滯住するものは永劫道を修すとも其堂奥に達する能はざるなり他の佛像經函枚擧す可らす宋の張商英の神燈傳を按するに無盡居士曾て此に在て神燈を見る成化の間趙惠王重て脩む清朝に至て菩薩頂臺麗寺と共に毎年錢糧を給して賚賜尤も渥し門を出て東門一百三層の石階を拾て上頂歸寓す此日行こと三十里

六月一日七佛寺に詣す前殿に賢劫七佛を供す後殿に龍華三會の畫軸を觀る次に集福寺に詣す前殿後殿共にシャクチアラ（大黑神）を供す次に樓觀谷太平興國寺を訪ふ前に觀音殿あり後に釋迦殿あり配殿に關帝を祠る西に五郎祠あり中央に陽延期の像を安す鐵棍長九尺なるを掛く重八十一斤五郎の常に携る所ろ碑あり庭に倒る山を上て進行して普樂院に至る門闕靚深結構宏壯乾隆帝の建る所ろ前殿釋迦佛を供す配殿ハタメ後殿シャクジャラを供す又配殿に章嘉あり數十の喇嘛各殿に諷經す北京の呼圖克圖或は大喇嘛朝山の時は此に宿泊すと云山を下て復た樓觀谷の左を過く崖畔に方て般若寺を獲たり金剛窟に連る唐無着茲に大士に謁す童子送りて指的して是金剛窟般若寺也と曰に因て後人寺を此處に建つ進て金剛窟に入るに前殿に釋尊を安す旁に大士の牙を供す大尺許其質堅固其色象の如し又鐵板に大士の脚印を捺す兩者を刷印して拜者に與ふ予窟内に入んとを圖る僧曰く止よ一ひ此窟に入て復た出る者なし予銳意燈を拿て進む窟高五尺口四尺暗黑咫尺を辨せす燈爲に屢は滅す行こと數十歩大士の小像を安す窟彌よ狹くして進む能はす乃ち悵然として回る

按するに祇洹圖に曰く三世諸佛供養の器俱に此に藏む迦葉佛の時神樂及經律悉く此に收入す昔佛陀波利遠く闍賓國を越て宋儀鳳元年茲士に達して臺山に到る老翁の諭誨に因て再ひ印度に還て佛頂尊勝陀羅尼經を齎らし來る譯し訖て波利梵本を持て五臺に往き金剛窟に入り復た出てす世に傳ふ清涼山梵筴ありと蓋し此を謂ふ歟

行こと數里華嚴谷に抵る（今東臺溝と曰ふ）浮烟翠を罨め蒼穹藹を含む中に碧山寺あり前に雁塔を建て旁に綠澗に臨む明成化の間建る所ろ清朝康熙三十七年帑金を發して重建す中庭に入雲天嶺の匾を掛く二碑あり戒壇殿堂宏寬釋尊を安す左右に十八羅漢觀音韋陀天の像あり遠く姑蘇より搬來すと云僧あり客堂に延く少焉して大軸を出して曰く珍寶今唯之を存するのみ輙はち之を展觀するに華嚴寶塔の圖にして長六丈濶六尺五寸華嚴經十萬字を書して以て線畫と爲す近て熟視するに細楷精好針の如く一畫を苟くもせす款に曰く江南姑蘇鄧尉山、聖恩禪師住持沙門、濟石書成華嚴經寶塔一座、奉供五臺碧山寺、永遠流通者。」相傳ふ十二年間潔齋恭敬三ひ草稿を起し遂に此大願を滿足して以て此寺に遙寄す精進堅固惟た敬歎

の外なし因て憶ふ彌陀願王の四十八願を建立したまふや諸の苦毒の中に在て我行精進にして忍て終に悔すと宣言したまふ我人此に由て救濟せらるることを得るなり人生十二年間の工夫を費して倘ほ後世求道の士をして欣慕慚愧措く能はざらしむ況や彌陀法皇(シヤウザイトン)の無量劫に於て願行を勤修したまふを乎次に一岡に登て善財洞を見る洞濶三間中に大士像を安ず此に在て眺望すれば前に過る所ろの諸廟歴歴算す可し大殿は道光年間建る所ろ楹に凭て嘯吟詩思盆涌す岡を下て華嚴嶺を訪ふ嶺は北臺の東南に在り梵仙山と相對す路險にして屏の若し千仞して上る嶺上大螺殿(ダクシン)あり異樹奇葩濃綠映發す臺懐の諸廟皆な眼下に萃る所謂脚疲處景愈幽なり前殿に丈六の金剛力士あり大殿に釋尊を安ず後殿に五頂文殊の大像を安ず康熙帝の幸する所ろ乾隆帝の建る所ろなり

午後二時北して三泉寺(サンチヨハンス)を過て阪路曲折石磴を躡て登る山嶺に壽寧寺(シヨウニンス)あり門に入て香を燒く前殿に釋尊後殿に宗咖巴及七佛の像を安ず配殿に三面六足の像あり是古の有名なる王子焚身寺なり按ずるに北齊帝高洋第三子宿命通を得て前世に在て人を殺し又自殺せしことを回憶し且身は重疾に嬰て醫療する能はず因て清涼山に入て至誠禮懺して大士を見んことを求む夢中に一老僧あり告て曰く子往昔唐死すること算なし今聖容を求んとして勞少くして且怠るに非ずや且子の身は子の有にあらず之を勉む可し王子寤て自ら念すらく此身必らず夙債を償ん乃ち大士の像前に於て薪を積て自ら焚て以て供養す帝哀悼勅して寺を建つ宋景德の初壽寧と改名す清朝康熙帝再び修め且つ御碑を賜ふ因て憶ふ如今尚蒙古滿洲より來詣する王族紳士中には爪を燃して供養する者あり頭上に燈を燃して巡拜する者あり是れ大士無量劫に於て無量の佛に事へ無量の身を捨て無量の行を修したまふ大願の任持する所ろなり然り而して本朝の道俗反て是の如き熱心なる求道の人に乏し蓋し大乘相應の地然く磊磊たる可らざるが致す所ろなるべし予輩は此を過て深く我身の怠惰を慚愧し併て彌陀佛に對する報恩の念油然として起り歡喜禁ずる能はず門を出て翻然逍徉薫風徐に來り聯嵐輝を含む南梵仙山に對し東華嚴嶺に埒す眺望開豁臺懐の諸廟一寓目にして盡く得たり平疇崇田其下に參錯して蒼瀛の渺茫たるか若し山を下て數里三塔寺(サンタス)に入るシヤクジヤラを安す高一丈三目哆口六手あり上の雙手に盆を捧げ中の雙手に劍を提げ左手に圓輪を執る胸間蟠蛇あり腰下に屈曲す脚下象面人身の像を蹈む極て奮怒の態を表す殿前三塔あり乾隆嘉慶二帝の建る所ろ時斜陽西に舂く急に寓に回る

二日西臺(シータイ)の游を圖る六時寓を出づ山嶺相屬し步步皆な峻阪右轉左廻行と十里玉花池(ユイホチ)を得たり池廣二尺許冷水飲に可なり萬壽寺(ワンシヨウス)傍に在り就て憩ふ五百羅漢三殿に充滿す明萬歴年間徑山愈公禪師此廟を創起す復た行こと十里奇崖絶巉の處を過ぐ嵌巖竇穴變幻百態其最大なる者を削て佛像を彫刻す攀援登臨箕踞して憩ふ會ま胡僧三人に遇ふ同伴して往こと廿里遂に臺頂に達す臺高三十五里項平なり周廣二里月峰巔に墜て儼として鏡を掛たるが如し因て掛月峯と名く千山拱立して巖谷幽邃なり小泉清冽にして雄風肅條たり古靈蹟十七あり今存する者七八石室に大士像を安ず胡僧二僕石に踞して動かす予施施然古蹤を尋ね翛々然物態を狀す疊石棋の若きあり唐の法林見る所の二聖對談石の距なるべし翩然臺を下て復た中臺に向ふ道路平坦蘚苔路滑かにして屢は顛仆す沿岡透迤すること數里前に香山を現す翠巒千仞形屏障の若し衣を寒けて上る茅草鞋を沒し荆棘衣を鉤す氣息喘喘衣裳皆濕ふ已にして中臺に上る臺高三十九里項平なり周廣五里蒼崖地を拔き翠巒空に浮ぶ因て翠巖峰と名く西北二臺と肩臂聯接す南晋陽を矚し北沙塞を凌ぐ五溪の發源あり二溪は左清河に注ぐ三溪は右西臺の下より峨口を出て滹沱に入る其靈蹟昔は二十有八今尚二十余を存す唐演教寺を建て舍利を鐵塔に藏む久しく年所を經て寺傾圮に屬す唐熙帝山に臨て新たに之を修む而して今僅かに白塔石室の存するあり予安行一日疲頓頗る甚し一ひ臺頂に上れは西西臺に對し北北臺を仰ぎ山峻く風多く前に背間汗を流すもの劇かに變して寒冷を覺ふ時に雲霧忽ち起て雷雷霹靂駭然山を下る會ま臺の西北隅を過て太華池を獲たり池に臨て影を照せは毫髮を辨す可し予小僕に謀て曰く更に北臺(ポイタイ)に上るへし僉な難色あり鋭意勉行峭崖を陡り深溪を越ふ山深き處ろ景愈よ佳なり岡巒迤逶四顧挹む可し行こと數里怪巖絶壁險狹にして登り難し藤蘿を捫し袂を褰けて登攀す脚膝心胸に點す汗流れて踵に至る站立して雪を嚙み喉を濕ほす已にして臺頂に上る臺高四十里頂平にして周廣四里峰巔斗牛に薄る回て叶斗峰と名く風雨雷電毎に半麓より出つ雲氣瀰漫東大河を瞻北沙漠を眺む聿に鉅觀たり四十里にして繁峙川に至り衆溪源を發して清河に入る其靈蹟廿有七今存するもの十餘臺上を徘徊すれは一境靜寂人籟都て絶つ北恒嶽を眺れは巖崷壁立我に朝宗するものの如し凡そ此臺に登れは四山頂を縮めて腰間に列位す猶衆星の北辰に向ふか如し乃ち往事を進回するに長城嶺は險艱を歷て始て高山に上るの玄關也北臺は修道全く成て眼に全牛なく惟た自然の妙越に飽く時に霹靂一聲半麓より鳴る雄風脚下に生し草嶺响を成す衆皆な色を失ふ便ち峰に沿て下る蘚壁萬仞宛も城堞に似たり渴すれは雪を嚙み躓けは旋轉す八時寓に回る此日行こと八十里困憊を極む

三日陰翳寓に在て休息す

四日晴天十時棲賢谷(ナエシエシン)に游ふ東臺の西南に在り一路河に沿て往く先棲賢寺に詣す碑あり唐熙帝の建る所ろ門を出て數里折て岩谷に沿て行く溪泉瀠々巨石に觸る宮裔嚮あり柳株其間に列植す風趣悠然已にして棲賢谷を得たり山皆な岩石石磴を躡み藤蘿を捫して登攀數百層始て其項に達す一小宇あり五面觀音の銅像を安す老喇嘛寺を護る專心番經を讀て願みす巖畔に洞あり泉涌く清澄鏡の如く掬飲味甘し廻廊を過て小亭に憩ふ一睹悠然清曠の致あり別に自ら一幽境也杏樹子を結ふ人の採り食ふに任す頃焉黑雲四合雷電激發雹を降す大さ豆の如し乃ち廟に入て雨を避く雨霽れ雲收る頃衣を樞げて巖を下る石路濕滑蘿を捫し樹に綠り僕と手を携ふ清泉瀠々たるもの變して激湍活活たり歸途更に玉皇廟を訪ふ(又曰帝釋宮)老子及呂祖を祠る傳に曰く摩騰法蘭の未た至らさる此山黄冠の居る所ろ白馬寺經を焚て釋道の眞僞を辨せしより永く佛化の靈區と爲る今に至て道士の棲む者なし帳然古今の盛衰を歎して回る

五日更に南臺(ナンタイ)の游を圖る道最も遠し四時騾に騎て發す僕二人隨行す七里にして南山寺(ナンシヤン)に抵る新修結構見る可し再ひ進行

一里石階を拾て山嶺に上る碧蘚翠巒を封して松籟蕭條たる處に一寺あり境内幽邃客堂に入て閑談半頃茶を煮菓を饗す殿内金剛菩薩を安す庭院に明月池あり昔人晦夜に皎月池に澄むを見る因て名く復た行と數里交ろ嶺下を過く青林綠篠壁上に生し一帶清澗屈曲して流る奇峰翠巒なる處に鎮海寺(チンハイス)あり殿堂雄壯四際邱岳松樹盤桓翩翩乎として青雲の中を歩するが如し心境自適す殿に上て釋尊及宗咖巴の像を拜す庭中に章嘉呼圖克圖の塔を建つ此を去て白雲寺(ポンスン)萬綠庵(ワンリアンプ)普安寺(アンス)を過て山溪を跋渉す遠山丁丁小童牘を驅る自然に詩味畵趣を沸かしむ崖畔千佛洞あり洞寛丈餘口狹く中闊く洞内に千佛を刻す清涼山誌に曰く嘉靖間僧道方なる者夜遊此に至る神燈萬點を見る既に出て旋て入る玉佛像其中に森列す更に進めは則ち波濤の聲を聞く悚懼出る能はす因て觀音の名號を持して願くは聖像を造らん即ち一燈前導して出つ乃ち洞に即て像を造るの舊蹟也行こと十里前頭高山を現出す則ち南臺なり傍に金燈寺(キンタンス)あり千山萬嶂中に包圍す前むと五里山項に達す臺高三十七里項盂を覆すか若し周一里山峰聳峒光翠を凝す雜花彌布猶ほ錦を鋪たるが若し亦た錦繡峰と名く其靈蹟廿一此日天晴て雲無く四顧渺茫五臺縣田畦の如く一眄して盡く異草奇木扮披對映百鳥喈喈紅霞縷縷芳草を藉て憩ふ天然の勝景丹青摸し難く言語狀す可らず予意恍ひ神往き口哦哦として止す僕曰く此を距る廿里清涼石あり盍を往て觀さるや乃ち路を轉して臺を下る石磴を過き谿谷を越ふ午を過て方に清涼谷(ナンリヤンコ)を得たり中臺の南四十里に在り清涼寺に釋尊及文殊の像を安す康熙帝の御筆水晶域竝ひに心會眞如の二額を揭ぐ中庭石あり厚六尺餘圍四丈七尺方面平正自然螺紋あり能く多人を容て隘からず清涼山誌に曰く昔異僧あり其上に趺座して衆の爲に法を說く梵音琅々狀貌畏るべし後人其座處を目して曼殊狀とす此を過て飯途に就く石磴を歷水崖を渉り直線又紆紆石橋あり清涼橋と曰く行こと數里一宇軒然空に浮ふが如きを見る則ち金閣寺(キンコス)也傳に曰く昔人金閣の空に浮ふを見て其地に歸て寺を建つ時に夕陽西に沈て群鴉噪鳴日暮竹林寺の傍を過く是れ便ち唐法照禪師の化竹林に悟入して寺を創て奇跡を志せし所ろ前に舍利塔あり傳に曰く明成化年間耕者石槨を得たり内に銀匣を藏む中に琉璃瓶を貯ふ舍利數百顆を盛る光色瑩澈匣上字を刻す弘治年間燕京の穆氏塔を建つ嘉靖の間重て脩むと此夜暗黑咫尺を辯せす山上炬火を買ふ能はず太た艱難を極む南山寺を過る比ひ金燈輪旋路旁に煌旺たり爲に暗黑を照す其狀怪む可し時に梵鐘三更を報ず已にして願に回れば俗人數輩低語して予を禮拜する者相踵く神燈の瑞を頌するなり乃ち臥床に入て潛思默考眠る能はず燈を剪て畢生の行化唯た念佛三昧に在り曾て南岳雲峰寺に於て一び五臺を感應し復た衡州湘東寺閣上に在て念佛三昧を結んで彌陀文殊普賢の三尊を感拜し梵衆の靈告に依て伴侶を結て五臺山に達し佛光寺に止息して一夜白光の燭照に導れて文殊大士の講堂に詣り親く聖容を禮して至道を懇求す大士示すに念佛三昧を以てし命して此法を人間に流布せしむ復た偈を說て汝等欲求解脫者、應當靜念彌陀佛と、宣示したまふの微意身心に徹到して卓を打て念言し作す曰く文殊大士は三世諸佛の覺母にして常に智慧を主りたまふ大勢至菩薩は本師彌陀の智

慧を受領したまふ又普賢大士は慈悲を主りて一切衆生を憐愍したまふ觀世音薩埵亦た本師彌陀慈悲の凝結なり然らば則ち大無量壽經所說の釋尊は彌陀如來の大寂定三昧に入て相好光明悉く彌陀如來と顯現したまふ又觀音勢至の悲智の二門は卽ち文殊普賢の悲智の二門也悲智圓滿攝化自在の妙用上智と下愚とを擇ぶたまはず均く念佛三昧に憑て救濟せらるべし故に他力の念佛は智慧にして信心も亦た智慧なり宜哉信仰醇熟の人は已に無明の暗黑を照破せられて信念相續して順次の往生することを得我高祖大師の「智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし、」「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかされ、」と示したまふもの始て自個に感得して五臺の聖境山容溪聲悉く皆な念佛三昧と變爲し身心悅豫轉た四肢の困頓を忘れて感泣滂沱として禁ずる能はず

六日陰天霧下る將に東臺(トンダイ)に游んとす衆堅く止めて曰く山懷晴天尙ほ臺頂晴雨計られず且つ飈風陰雨の日猛獸往來果して異變なきを保せす予曰く銳意靈境を覩る死も亦た辭せす乃ち騾に騎て往く僕畏れて隨はず山嶺を陟るに奇草異葩馥郁鼻を撲つ仰て臺項を望めば陰雲半峰を籠む漸く進て臺麓に至れば風起り霧下り黑雲頭上に往來す乃ち北麓より迂回して登る觀音坪を見る山を鑿て觀音像を安す陰雲密合咫尺を辨せす飈風瀕りに起て山鳴り谷震動し寒冷堪る能はず騾馬毛髮悚立肌革り汗濕ふ騾夫亦た敢て隨はず輙ち騾を舍て臺に上る臺高卅八里項鬣脊の若し周三里暄晴の日に方ては蒸雲日に浴し爽氣秋に澄む彷彿として滄瀛を見る因て望海峰と名く東溪の水北して滹沱に注く東南四十里阜平縣界に入る西北廿里繁峙縣界に入る其靈蹟十四元朝望海寺を建つ清朝康熙帝重て脩む傍に笠子塔あり傳に曰く宋の宣和間代の牧趙康弼なる者慈化大師と同く異僧の那羅頞に入るを見る斗笠を留て塔を建て之を藏む今皆な圮隳に就く舍あり憩ふへし小文殊像を安す恭く合掌して彌陀經を誦す彷徨四顧薄寒體に中て肌膚慘慄す風大に起れは室に隱れ風少く休めは出て觀る東方陰雲斷續山川隱見瑰奇勝觀眞に平生に超たり是に於て雄風に立ち白雲に坐し陰霧を戴き石に凭て眥を決すれは造化の活景來て雙矚に供し其奇絕妙絕に至ては言語文字の能く形容す可からす幾んと不可測の境界也因て思ふ吾何人そや汗穢不淨にして曾て淨戒を脩めす愚癡盲昧にして僧軌を飾らす惟た赤裸裸專ら彌陀佛名を念するのみ而して昨は南臺に於る神燈の感あり今復た乾坤活殺の靈妙を示したまふ大士の方便威神力蓋し測る可からす又忽ちに轉想すらく吾常に見眞大師の傳記を閱して頗る夢想の靈告多きを怪み殊に其信徒平太郎なる者公務に就て熊野祠に詣すに方て懇篤なる敎示を垂て賢善精進の虛儀作法を排して唯た一向專念の宗義を誨ふ果して平太郎祠神の感賞を蒙りし事蹟は他の非難を慮て之を口にせさりき是に於て乎廓然として之を知る是ある哉是ある哉不可思議の極る所は信仰の至る所ろに契機冥合す信念深厚ならすして焉んそ能く靈妙なる感應を得ん現前三昧とをからす如來を拜見疑はすの金言是也古人の所謂蘆山に上らされは其全景を知る能はさるもの一知半解の人にして初めて以て此を摸索す可らす信仰純熟の人は到底之を摸索す可らす信仰純熟の人にして初め

妙味を自得すべきのみ眺望の半日舊路に沿て回る喇嘛門外に迎る者多し此夜札薩克の室に入て清談時を移す且疑問答書を示す藏字讀む可らず即ち其條欵に就て之を問ふ皆予か問ふ所ろに齟齬す蓋し譯者漢文に通せず漢蒙藏の三譯を經て遂に問意を失するに至る歟其言ふ所ろ八相成道空寂觀法即身成佛念名見佛等に過ぎず最も喜ふべきは前に贈る所ろの彌陀如來の繪像を竈中に供して朝夕香を拈て佛名を念すと澆漓の要法洵とに尊信すべきなり寓に回る太原の人王秀才の訪問に接す

七日街に往て銅佛軀清凉山圖を贖ふ札薩克に面して數日の懇待を謝し明日辭し去て更に太原に遊て汾洲を經て曇鸞大師の舊蹟を探らんことを告く別に臨て札薩克雙手を舒て予か雙肩に壽帕を掛く喇嘛皆な予を禮して敬頌す曰く此帕を携る者は該敎の在る所ろ往くとして衣食住に窮することなしと且つ臺山製する所の念珠金蓮花木椀多羅牌等の物を贈る(完)

* * * *

問菊池上人登五臺山實話賦呈　　常觀

上人飛錫登五臺。　神足呵雲攀崔嵬。
孤峯頂上霧初散。　天空一碧月徘徊。
乾隆天子帝德峻。　忽見文殊騎獅來。
清話歷歷如面見。　佛足頂禮呼慶哉。

(三十七年八月十日於酒田淨福精舍作)

嘆　咏

草庵の若葉

左千夫

庭に一株の槐、幹は三本に生ひ立ちて、枝張などいと面白く、若葉端々しき此頃、朝宵に打ち眺めつゝ、思ふとはなく詠める歌いくつ

朝戸出に幼きものを携て若葉槐の下きよめすも

青絹を張れるみ笠と取りよろふ若葉槐の下かげに立つ

うらくはし風の靜けくゆるなべに槐の若葉眉動くなり

日を受けし槐若葉の下にほひみどりあかるく神さびにけり

ふみかくに倦みており立つ槐蔭月ひむかしの野を出る見ゆ

槐蔭若葉こほしみたゝずめば月遠くより吾を照らせり

蛙鳴く月夜よけくに心動きさ夜ふけにしてまた槐蔭

伏庵に住まひ居れとも心やすく槐若葉の月をたのしむ

* * * * *

植物園雜詠

常音

繁み立てる青葉若葉の下行けば日かげ葉もれて土もか青に

たづね來し若葉こほしみ手に近き下枝の諸葉手撫てゆくかも

行き行けど若葉はつきずあふぎ見るみ空かそけく葉の搖るゝ音

甲之

門入りて左にめぐる竹林つくるところに池たゝへたり

一本の榎の木若葉の下くさにしゞに咲きけり鷺草の花

常音

一本の榎圍みて咲く花の鷺草のはなあは雪のごとし

見るかぎりみどり色なす夏園の中に眞しろき鷺草の花

甲之

池のへの芝生のうへに休らひて水面浮きくる魚をながめつ

池に入る水瀧なして石に打つ音さやさやし風も吹きくるに

天しぬぐ木々の青葉の下枝に花枝さしかふ山空木かも

水の上を眺めて居ればおもむろに水面に花のうつりあり見ゆ
池の上の丘の木立のしげり葉の中ににほへりむらさきつゝじ
橋渡す池の中島藤だなのしたべにたちて四方をながめつ
立ちおほふ若葉下かげ池のべをよろほひさけり瑞花あやめ
藤棚の若葉しげりて乏しらにさけるもゆかし花のむらさき
遠く見る池のあなたの藤棚の下を行く人よそひすがしも

常　音

青雲としみ立つ樹々の下ゆきてみどり波ゆる池にいでたり
池の邊の木かげ涼しみ下り立ちて友となかめぬ若葉木立を
さゞ波の池の岸邊におりて立つ我か袖反す青葉風かも
さゞ波の來よる岸邊の岩の間の紅つつじ水にうつれり
池をめぐる若葉木立は水ぎはべにさかしま雲とうつりあり見ゆ

甲　之

日おもてはやゝあつき日を若葉かげ水べにあそぶ園のうれしも
つつじ花袖にふれつつ木の間道のぼるもゆかし遠見さけつつ
遠見れば天をかぎれる小日向の丘の木立よ家の屋根見ゆ
丘の上のたひらを見れば夕雲のむらさきあやめ咲きてつらなれり
夢に見るはかなき思ひ行きすぎて目に入るものはたゞ夏の花
夜畫の大地のめぐりとゞまれや名ぐはし園にあそぶ一日は
丘の上の青葉のかげに語りたるもへばなつかし又かへり見む
夏花のさかりの園の青葉かげ語らふ時し世もあらずけり

常　音

雲とおほふみどり若葉の下かげの金網の中鴛鴦浮きて居り
み空には若葉さやりて水の上を行くをし鳥のあとに引く波

甲　之

地にたるゝ櫻垂枝の下みちを花を遠見て行くかたのしも
丘の上の木立とぎれし日おもてに白き茨の咲きて散り居り
若葉かげみ雪白咲くつつじ花はなを乏しらに夏は來向ふ

時報

求道學舍紀念日

六月一日は求道學舍を開きたる紀念日なり、回顧せば明治三十五年之を開きてより恰も滿三年なり、吾人は佛天の冥祐の下に此の如き生活を繼續するを得る至大なる恩德を感謝し奉るもの也、抑々學舍の精神たるや其名の示すが如く道を求むるの同朋、佛陀の光明の中に平安なる生活を營み、大慈の恩德を仰ぎて宿緣の遠きを慶ぶもの佛陀矜哀の力によるに非んば何ぞ今日あるを得む、特に創立當時に入舍せられし帝國大學學生諸氏は今や正に卒業の榮譽を擔るゝに至れり、吾人は特に此時期に際して佛恩の浩なるを感謝せずむばあらず、乃ち同日午後二時同朋二十六人來賓として島田蓊根翁荻野文學士と共に學舍中庭に於て撮影し、引續きて一同佛間に集り、謹みて嘆異鈔を輪次拜讀し、嚴肅に感謝の至誠を致し、偶然にも大坂建立の御文を朗讀し奉りて、感泣に堪へざるものありき、式終りて一同食卓につき本年帝國大學卒業の阿刀田令造、葛原運次郎（已上史學科）今井正親、波岡茂輝（已上國文科）穴澤清次郎（政治科）佐治秀壽（英文科）諸君の祝賀を兼ね紀念日を祝せり、近角は拶挨して曰く、

回顧するに今より滿三年前、即ち明治三十五年六月一日清澤先生の勸により此家屋に引移りまして、唯何と云ふ考もなく、土地の便宜上帝國大學へ通ひ玉ふ諸君にして共に道を求め玉ふ人々と寢食を共にしたらばよからむと存じて、其意志を洩しつゝある間、九月大學の始まる頃に入舍し玉ひし方々は今回卒業し玉ひし諸君なり僞々諸君の此學舍に入られし因緣を考ふるに若も故意に力を用ゐることなくして、諸君も偶然欲するが儘に入舍し玉ひ、私も躊躇なく同居することを喜び、何とも形容の出來ぬ親みを生じたるは迚も一往の事とは考へられぬ、殊に此學舍の特色とも稱すべきことは一旦關係を有したる人は始終連續して變らぬことなり、各個人の都合によりて轉居の止むを得ざることあるも、必ず再ひ入舍し玉ひしことなり、たとひ外にある時も常に往復の絶へぬこと也、これは決して私事とは考へぬ、畢竟佛緣を以て結びつけらるゝ已上はとても御互に人間の力にて分からぬものである、特に毎朝嘆異鈔を拜讀しつゝ、佛前に御禮を上げるだけにても因緣決して淺からぬ、こゝ思ふ、況んや各自信念の圓熟し來る機會の如きは唯不思議なる佛の御催と嘆ぜねばならぬ次第である、私は此佛陀の御力なかりせば、とても此學舍を開き、またつゞけることは出來ぬ、何んとならば自分の力にて何事も出來ぬとを自覺して居るゆへにされど御佛の力を信ずれば從來既に諸君の實驗し玉ふごとき大なる力あるものを、諸君は非常の勉强を以て卒業の光榮を擔ぼれしを親賀するにつけても私は御佛に對して謝に堪へられぬ、諸君が是より社會に出てゝ活動し、學界に入りて研鑽を重ね玉ふにつきても御佛の御護りの偉大なるを確信して居ります、諸君も恐くは終生其結緣の空しからざるを感ず、殊に非常なる出來事に遭遇し玉ふ毎に其味を見出し玉ふとを信じます、唯御互に御恩の高きを感謝するの外はありませぬ云云

諸君よりも挨拶あり、往を懷ひ、來を語り、夜に入りて散會せり

清澤師三年忌

六月六日は清澤先生の三年忌に相當するを以て眞宗大學丙申會にては中村不折氏の力を込められたる油畫肖像の除幕式を行はれたり、師が嚴にして溫なる音容を長へに同講堂に見るを得べし、南條文雄師の追懷談及び一同の讀經ありたり又午後浪々洞の企にて三年忌法要を同講堂に行はれたり、讀經の後、多田師によりて先生の絕筆『我信念』は朗讀されたり一同の燒香齋藤師荻野文學士近角の感話あり、澤柳政太郎氏感慨を洩して曰く

今日清澤師の三年忌に遇ふて相變らず感ずることは、教界の內外に種々の問題が起り來りたるときは若し清澤師あらば痛快なる解決を見ることを得べしと思ふことなり、去るものは日々に疎き習なるに此の如く益々清澤師が墓はるゝ所以のものは師が尋常ならざりしを知るべし、されど事ありて徒らに偉人を墓ふが如きは愚痴に過ぎず、寧ろ各自之を勉むべきにあらずや、回顧せば清澤師の病に罹りたる時通常人ならば斃るべき勢たりし、然るに師は其病軀を提げて起つや實に測るべからざる仕事をせられたり、苟も健康なる身体を有するものが何

の爲すところもなくして徒らに師を慕ふは師に對しても恥つべき事也、精神界の人々はたしかに其精神上の一面を傳へて其光明を輝かしつゝあるに相違なきも之を以て清澤師の全部を盡したるとは言ふべからず、晩年師が氣力衰へたりなど世上に評ずるものあれど、私は決してかく思はず師はますゝ活動せられたる事を信ず、研究にまれ、教育にまれ、各大に勉め殊に忘れられたる師が他の半面たる大に働くことを發揮せさるべからず云云

又求道學舍にても拜禮讀經して追悼し又荻野老婆の請により讀經ありしを以て吾人は此日前後四回の御緣に遇へり

夏期修養の期來る

佛陀の敎團に夏安居の制あり、昨年の本誌之を引きて從來の講習會に大に修養の意味の加ふべきを論じたることあり、今や再び其時期來る、今や國民は大に戰ひて大に捷てり、而して既に平和の聲天の一方より來る、是より修養上大に心を用ゆべきの時にあらずや、殊に平素求道に志すもの豈徒爾にして夏期休暇の時を過すべけむや、大日本佛敎青年會の講習會も昨年の如く、東京に開かるゝ由、又昨年近角は信州北信飯山附近の修養會に出席して嘆異鈔を講じたりき、近時出版にかゝる「懺悔錄」は其問題なり而して亦今年八月二十日より一週間同地の招に應じて「親鸞聖人」を中心として其信仰を鑽仰し奉る筈なり、讀者諸君各其所を異にし、境遇を殊にすと雖、冀くば同一念佛の無碍の一道を味ひ奉らむことを

（本月は發行殊に後れしことを謝す）

▲求道學舍の日曜講話題

○願力無窮（五月七日）　女子信仰談話會
○無碍自在（五月十四日）　信仰談話會
○佛陀の引接（五月廿一日）
○純他力（五月二十八日）
○佛天の普遍（六月四日）
○佛を信すれば自在也（六月十一日）

第二求道會講話題

○至誠感應（五月六日）　信仰談話會
○絶對の地盤（五月十三日）
○攝取の力（五月二十日）
○人生の歸趣（五月二十七日）
○確信時代（六月三日）
○確信と實行（六月十日）

第三求道會講話

○信仰の價値（六月二十七日）

▲第三求道會講話題

○信仰の價値（五月二十七日）

* * * * *

求道會館設立喜捨金
受領報告（第八回）

金壹圓也（即納）　羽村　西多摩求道會殿
金壹圓也（即納）　東京　中尾一郎殿
金五圓也（即納）　東京　松井茂殿
金五圓也（即納）　陸前花卷　宮澤政次郎殿
金五圓也（即納）　肥前佐賀　伊丹誠一殿
金壹圓也（即納）　但馬　吉井懷順殿
金壹圓也（即納）　伊勢　訓覇是宗殿

小計拾九圓也

通計金千百四十四圓八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候茲に謹んで感謝し奉り候也

新刊廣告

近角常觀著

懺悔錄

袖珍百五十頁
附錄「歎異鈔」
定價金貳拾錢
郵稅四錢

本書は近時求道者が信仰上の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓たる罪惡救濟の意義を闡明せむが爲めに作りたるもの也。而して著者は先づ自己が經驗に筆を起して、半年已上胸中に於て寸時も止むことなかりし煩悶を叙し、最後に佛陀攝取の慈光に接したる實感を披瀝し、又著者の經驗を聞き獄中大安慰を得たる事實を詳說す。是れ懺悔錄の名ある所以にして眞摯一點の修飾を施さゞる所、讀者を導きて共に佛陀の慈懷に眠るの想あらしむ。特に韋提希夫人の求哀懺悔、阿闍世王の苦悶救濟を描くに至りては二千年前王舍城に於ける悲劇を現在に見るが如くならしめ、現代の哲學理論中に於ける信仰問題は、即ち是れ印度古代の六派哲學中に於ける佛陀慈愛の實驗と全く同一なるを說明し。全篇親鸞聖人の信仰と人生觀とを寫し去り寫し來りて餘蘊なからしむ。冀くば眞摯一讀あらむことを。

發行所　東京市本郷區春木町二丁目二十一番地　森江分店
賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

清澤滿之序　近角常觀著

信仰餘瀝

第七版

定價　並製拾五錢　上製貳拾五錢　郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區四丁目五番地　文明堂
賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

◎再版ヒルドレス日本古今記豫約廣告

文學士村川堅固先生校訂註解

英文 ヒルドレス日本古今記

HILDRETH, JAPAN AS IT WAS AND IS.

LONDOW, SAMPSON JOW, SON & CO., 1856 EDIED WITH SUPPLEMENTARY NOTES.

BY K. MURAKAWA.

菊版表紙色クロース金文字入
上等製本全一冊紙數凡六百頁

定價金六圓
豫約金參圓五十錢

右ヒルドレス日本古今記は邦人の容易に得難き外國の史料によりて編纂せる日本歴史にして上はマルコ、ポーローの元冠の記事より、降りて幕末下田條約締結當時の諸報告に至るまで、忠實に外國史料の梗概を擧げ、必要に從ひ、原文を其儘引用せる箇處も亦尠からず故に一たび本書を繙くときは、マルコ、ポーロー。ピンー、セーリス、アダムス。ケムプエル、ツーンベルグ、チ、ング。ゴローニン以下歴代の外國史料の大體に通ずるを得べし。故に本書の國史研究者に與ふる便益の小ならざるは、之を一讀せるものゝ皆知る所なれども、本書は四十餘年前の出版に係り今日は既に絶版となり、坊間に出づるもの極めて稀なるを以て、去る明治三十五年五百部を限り飜刻して發賣したるに、忽ちにして賣切れ、多數の希望者の需めに應ずる能はざりし、今回此等の諸君の渇望によりて更に再版五百部を限りて印刷し、英文學の大家山縣五十雄先生に校正を依頼して第一版の誤植を正し、完璧として世に出すことゝしたり、冀くは速に豫約御加入あらんことを

再版出來期限 明治三十八年六月三十日

●飜刻部數 五百部（應募者の數に關せず五百部丈印刷中なるを以て、此數に超過するときは謝絶す）

●豫約期限 明治三十八年六月二十五日限

●豫約代價 一部金參圓五拾錢

●拂込方法 東京市内豫約の御方は本書配達の際書籍引替に代金御拂渡被下度地方豫約の御方へは代金引替小包郵便を以て送本可仕候間豫約金並に遞送料共御拂込被下度候

豫約申込所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍

豫約取次所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 島連太郎 森江分店

洋裝美全一冊正價金六十五錢 郵稅金八錢
特別割引（限り五千部）金五十五錢 郵稅金八錢

本書は著者が多年の研究を傾けて平易に印度佛教の大要を示されたる者にして筆を釋尊以前の宗教に起し嶄新なる觀察を以て釋尊の傳を叙し佛陀の人格原始佛教の狀態三藏の結集、戒律の大要、阿輸迦王迦賦色迦王の事蹟、馬鳴、龍樹、

文學博士 井上哲次郎先生序

御茶ノ水書房

印度佛教史概

境野哲先生著

無着、世親等の教義、世親以後の大乘等を説きて其盛衰興亡の狀を示したるものにして苟くも佛教に志ある者の一讀せざるべからざるの珍書たり著者が佛教史家としての價値は世に定評あり

發行元 東京市仮倉町五丁目 電話新橋二九七二 森江本店
發賣所 東京市本郷春木町二 森江分店

武家時代文學最書

梅澤和軒先生校訂

第二編目次

女學範 大江資衡
門田の早苗 伴蒿蹊
夜の鶴 阿佛尼
四民の友 加賀千代
女實語教 作者不詳
消息 德川家康
女諸禮集 作者不詳
進物便覽 作者不詳
朧月夜 野中婉女
女今川 作者不詳
兒教訓歌 宗祇法師

一冊定價金三十五錢
六冊前金一圓九十錢

發行所 東京麹町區有樂町一ノ三 有樂社

常盤文學士纂

佛陀聖訓

訂正四版

定價 上製金卅五錢 並製金廿三錢 郵稅四錢

拾部已上ハ特別減價一割引ノ上郵稅ヲ負擔ス

◉以て佛教の大要を知るべし。

◉以て講話教誨の講本に供ふべし。

◉以て修養の箴、家庭の規とすべし。

好評嘖々、發行の月、初版品切れ、第三版に次ぐに、直ちに第四版を以てして、猶殘餘多からす、之に對すれば、佛陀の溫容彷彿として、眼前にあるが如く、德訓諄々として、心絃に響く、乞ふ早く一本を手にして、好評の至當なるを知り給へ、

發行所 東京市小石川區白山前町三十一 無我山房

取次所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

文學士近角常觀先生序 橋川惠順先生序

文學博士井上圓了先生跋 松本雪城先生著 （近日發行）

戰時教材 第八篇

信仰感話 戰爭と家庭

▲四六版美裝 ▲百五十頁 ▲正價貳拾錢 ▲郵稅四錢

本書は之れ實に著者が熱烈の信仰により て解決せられたる人世問題の眞精神也（卷中收む）

自己の所或は實驗せる信仰の披瀝あるり或は戰爭の悲慘なる現象によりて興へられたる靈訓の告白あり或は又家庭の裏面に横はれる暗黑の關門を開く妙術の教示あり時に死生の巷に立ちて死迷へる者を啓導し時に病床の憂悶に閉されて呻吟せるものを慰籍し時に人生の不如意なるを嘲ちて自ら失望の淵に沈める者を救濟し機に臨み變に應じて縱說横論明快痛切の筆端自然に活躍して如來招喚（德育を宣傳せり鑑し之れ）戰勝國民の警鐘家庭の好師範布教傳道家の秘鑰指針也（敢て大方の座右に一本を勸む）

發行所 京都市下京區下ル東六條中珠數 法藏館 電話二二五八番

賣捌所 ▲東京 ▲文明堂 ▲光融館 ▲鴻盟社 ▲森江佐七 ▲長澤清九郎

○「アシビ」は文學專攻の雜誌なり

○「アシビ」は健確なる主張本領を守持す

○「アシビ」超然として時代風潮の外に立つ

「アシビ」二卷三目次

△萬葉集短歌私考……伊藤左千夫

△才丸行き……長塚節

△春季雜詠……同

△課題選歌……同選

△歌譚抄……左千夫

△歌譚抄を讀みて……節

△沼津小遊……左千夫

△十九日會記事……

△春光即吟錄……歌眞

△露國內亂……石原阿都志

△無一塵庵歌帖……左千夫

△床に關する記事……釜持

△雜題選歌……左千夫選

三井甲之、古泉千樫、柳の戸、胡桃澤勘內、星山月秋、村上しみむろ、佐東紅東、篠原志都兒、望月光男之諸子最も盛なり

△桃（新體詩）……山百合

△東京歌會及び地方歌會……

△弔野口寧齋先生……左千夫

天下眞面目なる文學嗜好者に對して敢て一顧を請ふ

一部定價金拾錢郵稅五厘前金六部以上郵稅不要

東京市本所區茅場町三丁目

發行所 根岸短歌會

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす

一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事

但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事

一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事

一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事

一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年四月廿八日印刷

明治三十八年六月一日發行

發行兼編輯人 百目木智璉

印刷人 白土幸力

東京市本郷區森川町一番地

發行所 求道發行所 （電話下谷二四三二）

東京市神田區神保町

大賣捌所 東京堂

同 本郷四丁目 文明堂

求道第二卷第五號　明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可　明治三十八年六月一日發行（毎月一回一日發行）

前號要目

求道

◎惡人救濟の德音《「歎異鈔」の眞髓》

◎信門樞機

煩悶と自覺

人數の同價値

暗中の一微光

信仰と不可思議

光明の人生

講話

◎佛誕生の歡喜

◎我等は如來の子なり

實驗

◎黑田最勝君を哭す　近角常觀

露蹟

◎五臺山探勝記　菊池秀言

嘆咏

◎春興　左千夫

◎短歌拾首　紫峽、甲之

◎四尾連湖　甲之

時報

◎羅尊降誕奉祝の聖典◎新緣新想◎巢鴨大學の信念◎高等師範の佛敎會◎西多摩求道會◎上田求道會◎講話題等

▲信仰消息